
散りゆく桜の花のようにそっと

上原直也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

散りゆく桜の花のようにそっと

【Nコード】

N5273K

【作者名】

上原直也

【あらすじ】

十年近い歳月を過ごした東京を引き払って実家に帰ることを決意したわたしは、ふと、友人に会いに行くことを思いつく。

いつの間にか失ってしまった希望。淡い恋の記憶。過ぎ去ってしまったいくつもの季節。そしてこれからのこと。

桜の花と思い出と友達のこと

沢田のことを思い出したのは、その小説が見つかったからだった。

その小説は、引越しの準備をしているときに色んなものを放り込んでおいたダンボールのなかから見つかった。

ずいぶん前に、沢田が手紙と一緒に同封して送ってくれていたのだが、いつか読もうと思いつながら、つい、ずっとそのままにしてしまっていた。

沢田の夢は、小説家になることだった。

沢田と知り合ったのは二十六のときだ。わたしがまだアルバイトをしながらミュージシャンを夢見ていた頃だ。恥ずかしい話だが、わたしにも若い頃はあった。そして沢田もアルバイトをしながら小説家になることを志していた。

沢田はその当時わたしがアルバイトをしていた喫茶店に新人として入ってきた。その喫茶店は、セルフサービスの店で、夜の暇な時間帯はふたりで店を回す。わたしも沢田も夜の時間に働くことが多い、何度か一緒に働いているうちに親しくなった。親しくなったのは、歳が近いということもあったのかもしれない。

沢田はわたしのひとつ歳下で、二十五だった。その店で働いているのは、大抵大学生くらいの子ばかりだったから、わたしと同じように何かを目指していて、しかも、年齢が近い人間というのは滅多にいなかった。だから、自然と親しみが沸いた。

わたしと沢田は店を閉めたあと、よく狭い事務所で遅くまで話し

込んだ。沢田はわたしに音楽のことを聞きたがったし、逆にわたしは沢田に小説のことを教えてもらった。

何度か、わたしは沢田にその書いた小説を読ませてくれと頼んだことがある。でも、そのたびに沢田は恥ずかしいものだからと言って読ませてはくれなかった。どんな話を書いているのか？とわたしが訊くと、沢田は照れ臭そうに笑って、いい小説だよ、自分にとつてはねと答えた。その小説を読んだひとが少しでも幸せな気持ちになれたり、啓発されるような小説が書きたいと思っている、と、彼は語った。

「きみは甘えてるんだよ」

と、部長はいくらか不機嫌そうにわたしに説教した。わたしが会社を辞めることを告げてからしばらくしてからのことだ。わたしは部長に呼び出されて、部長とふたりきりで喫茶店で話をした。

部長はなぜわたしに会社を辞めるのか問い詰めてきた。わたしは部長の問に対して、他にやりたいことができたからだと答えた。部長はわたしの答えにあまり納得しなかったようだった。

「そんなふうにいると、いつまでも同じようなことを繰り返すことになるぞ」

と、部長は脅すように言った。

わたしが勤めていた会社を辞めることを決意したのは、六月の半ばだった。もう、うんざりだった。何がどういつうにうんざりしたのかと訊かれても上手く説明できない。とにかく、色々だ。人間関係や、売り上げや、ノルマを気にすることが、管理されることが、

もう、嫌になつてしまつたのだ。会社を辞めるまで引継ぎなどなんだかんだ色々あり、正式に退社したときには八月になっていた。

八月。季節は既に夏だ。

夏は昔から嫌いな季節ではないが、しかし、歳とともにいつしか夏に対してそれに相応しい輝きを感じられなくなつてきている気がする。

仕事を辞めたあとどうするは何も決めていなかった。ほとんど思いつきで辞めたようなもので、我ながら自分の無計画さにはあきれてしまうが、まあ、いいか、と、どこか開き直っている自分もいた。とりあえずは失業保険もあるし、決して多くはないが、いくらかの貯金もある。

といって、今までのように定期的に収入があるわけではないので、生活の見直しは迫られた。とりあえずわたしが決めたのは引越した。

わたしが今住んでいるのは家賃七万四千円のアパートで、仕事を辞めたあとも、この家賃を月々払い続けるのは正直キツかった。友達の家に転がり込むことや、もつと家賃の安いアパートに引越すことなども色々考えたのだが、結局決めたのは、実家のある群馬に帰ることだった。そこであれば、家賃も、光熱費も発生しない。しばらくのあいだは無職でも平気だ。

もともと両親は昔からわたしが実家に帰ることを望んでいた。特に反対はしなかった。仕事を辞めたことに関しても、わたしが女なので結婚すればなんとかなるだろうとも考えているようだ。昔からわたしの両親は物事に対して楽観的な考え方をする方だし、わ

たしの生き方にあまり干渉してこない。

「ほんとに行っちゃうんだ」

久美子はわたしの部屋を見回すと、寂しそうというよりは、珍しい光景に興奮しているような口ぶりで言った。わたしの部屋は引越し作業の途中で、これ以上はないというくらい派手に散らかっている。分解したばかりのスチールラック。空っぽの本棚。荷物の詰め終わったダンボールの箱。ゴミ袋。ゴミ袋。

「まあね」

と、わたしは久美子の発言に簡単に相槌を打った。

榎本久美子は、わたしよりもふたつ年下で二十七歳だ。榎本久美子とはわたしが先月まで勤めていたチエーン展開している喫茶店で知り合って親しくなった。歳は違うが、彼女とは同期だった。

わたしはミュージシャンを目指していた頃アルバイトをしていた喫茶店にそのまま就職した。一方、久美子は大学を卒業したあと他の会社に勤めていて、そのあとわたしが勤めていた喫茶店の会社に転職してきた。だから、彼女とは年齢は違っても同期だった。以前勤めていた喫茶店の会社はどちらかというところあまり好きになれない人間が多かったが、久美子だけは特別に馬が合った。

久美子は今日引越しの手伝いをしてくれるということで、わたしのアパートを訪ねてきてくれている。

「だけど、いくら仕事辞めたからってなにも東京からひきあげなくとも良かったんじゃない？」

久美子は自分の鞆を適当にフローリングの床の上に置くと、わたしがしているダンボールに荷物を詰め込む作業を手伝ってくれなが

ら言った。

「それもそうんだけどさ」

と、わたしはダンボールのなかに荷物を詰め込みながら答えた。

「だって、仕事にしたって、群馬に戻るよりは東京の方が色々あるでしょ？」

「それでも色々考えた末の結論なのよ」

と、わたしは言った。

「もうね、東京はいいかなって思って」

わたしが呟くように言うと、久美子は顔をあげて、少し目を細めて探るようにわたしの顔をじっと見つめた。それから、また顔を俯けて作業をはじめると、

「どうということよそれ？」

と、訊いてきた。

わたしは手を休めて、窓の外に見える葉桜を少しのあいだ見つめた。

わたしのアパートの前の道は国道になっていて、その道にそって桜の木がずっと植えられている。桜の花が咲く頃はかなり綺麗だ。わたしは何ヶ月か前の、アパートの前の道が満開の桜の花で一杯になっていた頃の光景を、少し、思い出した。

「要するに、もう、東京に未練はないってことかな」

わたしは休めていた手を再び動かしはじめながらなんでもないふうを装って言った。それでも、そう言っただけわたしの声が、ほんの僅かに惨めさを帯びてしまうのはどうしようもなかった。

人生というのは、何か諦めたり、妥協したり、失ったりすることの連続でできているのかな、と、ときどき、心から何か冷たい水が零れていくように思うことがある。あるいはこういう想いは感傷的過ぎるのかもしれないが、でも、それにしても。

沢田がそれまで住んでいた東京のアパートを引き払って、実家のある兵庫県に帰っていったのは、今から二年前の春だった。

沢田の実家は自営業をやっているらしいのだが、その沢田の父親がいつまで経っても就職しない沢田にしびれをきらして、彼に実家に戻ることを強要したらしいのだ。

わたしは沢田の引越しを手伝った。沢田はもともと荷物が少ない男だったから、あつという間には引越し作業は終わってしまった。

引越し作業が終わってしまうと、わたしと沢田は沢田の部屋で、ヴェランダの外に見える桜の花を眺めながら、一緒に缶ビールを飲んだ。

沢田が住んでいたアパートは、わたしのアパートの近所にあり、やはり沢田のアパートのヴェランダからも国道に沿って植えられた桜の花を見ることができた。

わたしたちは缶ビールを飲みながらお互いに黙りがちだった。沈黙のあいだにぽつんぽつんと言葉を置いてく感じだった。

風が吹くたびにずいぶんとたくさんの桜の花びらが空間を淡い桃色に染めながら散っていった。

「・・・毎年思うことだけど」

いくらか長い沈黙のあとで、沢田がゆっくりと口を開いて言った。

わたしはヴェランダの外に向けていた視線を、沢田の横顔に向けた。沢田もわたしの方を振り返った。沢田はわたしと目が合うと、目元で照れ臭そうに笑った。それからまた沢田は視線をヴェランダの外に戻すと、

「やっぱり桜の花はきれいだよな」

と、微かに目を細めて、独り言を言うように言った。

「確かにね」

と、わたしもヴェランダの外に見える桜の花に視線を戻しながら小さな声で共感した。

「東京に来て最初の年、ここのアパートの窓から桜の花を観たとき、すごく感動したのをよく覚えてるよ」

沢田は口元に淡い笑みを湛えて懐かしそうに言った。

「・・・なにかも上手くいくような気がしてたな。努力次第でなんだってできる、そんな気がしてた・・・俺もまだ若かったからね」
沢田はそこまで口にする、またわたしの方を振り向いて、苦笑した。口から空気から漏れていくような寂しそうな笑い方だった。

「まあ、現実なんてそんなもんだよ。なかなか上手くなんていかないもんだよ」

わたしは言いながら、これは半分くらい自分に言い聞かせてるな、と、可笑しかった。過ぎ去ってしまったいくつもの季節。遠い風景。

誰かの明るい笑い声。そんなものを、わたしは心に透き通った冷たい風が吹いていくように思い出した。

またしばらくの沈黙があった。

開け放した窓から風が吹き込んできていて、その風は遠慮がちにわたしと沢田の座っている空間のあいだを抜けていった。春特有の甘いような香を含んだ風で、でも、その風にはまだほんの少し冬の余韻が残っていて、セーター一枚ではいくらか肌寒く感じられた。

「・・・昔ね、桜の花を題材に小説を書こうと思ったことがあるんだ」

いくらかの沈黙のあとで、沢田はふと思いついたように話出した。

わたしは沢田の横顔に視線を戻すと、うん、と、相槌を打った。

「俺がはじめて自分で物語を書こうと思ったときのこと、高校二年のときなんだけど、そのとき、思ったんだ。こんなふうに桜の花みたいな、きれいで、優しい感じの小説が書けたらいいだろうなって。誰かを優しい気持ちにすることができるよう。誰かに希望を与えることができるような」

「そっか」

と、わたしはどんなふうに感想を述べたらいいのかわからなかったので、ただ頷いた。

「でもね、結局、その小説は完成しなかったよ」

と、沢田は苦笑して続けた。

「物語のイメージは頭のなかにあるんだけど、でも、どうしても、それを具体的な形にすることができなくてさ・・・だから、結局、断

念した」

「そっか」

と、わたしは頷いた。

弱い風が、わたしの耳元を、何かを伝えようとするように吹きす
ぎていった。

「でも」

少しの沈黙のあとで、わたしは沢田の方を振り向くと言った。

「今からでも書いてみたら？」

と、わたしは言った。

「今なら、意外と書けるかもよ。べつに実家に帰るからって、もう
小説は書かないつもりってわけでもないんですよ？」

わたしがそう言うと、沢田はわたしの真意を探るように、あるい
は訝るようにじっとわたしの顔を見つめた。それから彼は困ったよ
うに口元を綻ばせると、少し顔を俯けながら、

「そうだな」

と、頷いた。

「書いてみようかな。もう一度」

と、沢田は弱い声で言った。

「その小説が完成したら見せてよ」

と、わたしは微笑んで言った。

夕暮れの光と友達との話、そしてこれからのこと

久美子が手伝ってくれたこともあって、引越し作業は夕方頃にはほぼ片付いた。あとは細々としたものを片付ければいいだけだ。狭い部屋だと思っていたが、それでも荷物が片付いてしまうと、やけに広々として感じられた。

カーテンの隙間から、紅の色素が濃くなった太陽の光が差し込んできていて、それは部屋のなかに入り込むと、淡く溶けて半透明の紅の色彩に空間を染めていった。蝉が突然鳴き始めたかと思うと、思い直したようにすぐに鳴きやんだ。

「ありがとう」

と、わたしは久美子の顔を見ると、微笑んで言った。

「おかげで助かったよ。これなら明日の引越しには十分間に合いそう」

久美子はわたしの科白に何も言わずにただ微笑んだ。それから、久美子は荷物が片付いて、がらんとした部屋に改めて視線を向けると、

「だけど、ほんとにいなくなっちゃうんだねえ」

と、言った。

そう言った彼女の口調は、前回とは違って、いくぶん名残惜しそうにも感じられた。わたしは彼女に誘われるようにして、自分の部屋に視線を向けてみた。一刻もここから早く出て行きたいと思っていたはずなのに、久美子の言葉を耳にしたせい、急に寂しさのよ

うな感情がこみ上げてきた。

東京に来てから十年近い歳月を、この部屋で過ごした。この部屋で随分色んなことがあった気がしたし、逆に何もなかった気もした。よくわからなかった。心のなかにはぼんやりとした、ちょうど夕暮れの光のような感情の塊があった。

わたしたちは部屋を出ると、近くで外食をすることにした。

わたしのアパートは繁華街から離れた場所にあるのであまり大した店はないのだが、それでもファミレス系の店なら近くにいくつかある。わたしたちは少し悩んだ末に、アパートから徒歩十分くらいの距離にあるうどん屋に行くことにした。

うどん屋は、まだ夕方の早い時間帯ということもあって、比較的空いていた。わたしたちは店員に奥の窓際の席に通されて、向かい合わせに腰かけた。

わたしは店員にカツ丼とうどんのセットを注文し、久美子はてんぷらそば注文した。注文した料理はすぐに運ばれてきて、ひどく空腹だったわたしたちはほとんど無言で料理を食べた。味は特別美味しくないし、不味くもない。

「実家に帰ったあと、どうするの？」

久美子は麦茶の入ったコップを口元に運びながら尋ねてきた。

「さあ」

と、わたしは自嘲気味に口元を綻ばせると首を傾げた。

それから、わたしはなんとなく窓の外に視線を向けてみた。時刻はもう六時を過ぎていたが、夏の日差しは長く、外はまだ明るかつ

た。紅というよりは水で薄めたような淡い黄色の色彩に包まれた世界がそこにはあった。

「さあって、何も決めてないの？」

と、久美子は不思議そうに言った。

わたしは視線を久美子の顔に戻すと頷いた。

「でも、それもいいかもね」

と、久美子は労わるように優しい目でわたしの顔を見ると言った。
「しばらく何もしていっていいのもいいかも」

「だけど、いいなあ美樹は」

久美子は微笑すると、羨ましそうに言った。

「もう、仕事いなくてもいいんだもんね」

わたしは久美子の発言に苦笑すると、

「久美子は明日は仕事？」

と、尋ねてみた。すると、久美子は短く頷いた。

「明日はオープンだから、六時半から」

「大変だね」

と、わたしは軽く笑って言った。

「まあね」

と、久美子は微苦笑すると、仕方がないというふうに軽く肩をすくめた。

「いつそ、久美子も辞めちゃえば？」

と、わたしが冗談半分に言うと、

「わたしも辞めちゃおうかなあ」

と、久美子は軽く笑って言った。

「この仕事って結構体力使うしねえ。立ちっぱなしだから腰も痛くなるし」

久美子は頬杖をつく、大袈裟にうんざりした表情を作った。それから、

「だけど」

と、久美子はそれまで浮かべていた明るい表情を打ち消して、
「仕事を辞めちゃったら辞めちゃったで、生活していけなくなっちゃうしねえ」

と、軽く眼差しを伏せながら、どこか思いつめたような口調で言った。

「・・・わたしに何か特別な才能でもあれば良かったんだけど」

久美子は独り言を言うように少し小さな声で言った。

わたしは久美子の科白に適当な感想が思いつかなくて少しのあいだ黙っていたけれど、

「大庭くんは？」

と、ふと思いついて言ってみた。

大庭くんというのは、久美子が現在付き合っている恋人のことだ。

久美子はわたしの問の意味がわからなかったのか、なんのこと？
というように眼差しをあげて、わたしの顔を見つめてきた。

「大庭くんと結婚して、彼に養ってもらえばいいじゃん」

わたしは冗談めかして言った。すると、久美子は、
「だめだよ。あいつは」

と、頬杖をつくのをやめて、小さく笑った。

「あいつは最近までフリーターやってて、やっと就職したばかりだもん。わたしのこと養う余裕なんてないよ」

「そっか」

と、わたしは曖昧に微笑して頷いた。

久美子の恋人である大庭くんは、一年前くらいまでわたしと同じでアルバイトをしながらミュージシャンになることを目指していた。でも、今はその夢を断念して、やはりわたしと同じようにそのままアルバイトをしていたパチンコ店に就職した。

「大庭くんはどう？仕事頑張ってる？」

わたしはなんとなく尋ねてみた。わたしは過去に一度だけ、久美子と一緒に大庭くんを飲みに行ったことがある。大庭くんは明るくて、冗談をたくさん言う面白いひとだという印象があった。

「さあ、どうだろう」

と、久美子は小さく笑って、首を傾げた。

「たぶん、適当にやってるんじゃないかな。アイツが真面目に働いてるところなんて想像つかないし」

久美子はそう言うてから、愉快そうに笑った。つられようにしてわたしも曖昧に笑った。

少しの沈黙があつて、その沈黙のなかに外の通りを走り過ぎていく車の音やバイクの音が聞こえた。それから、どこか近くの公園で騒いでいるらしい子供たちの歓声も微かに聞こえてきた。気がつく、日の光は急速のその輝きを失いはじめていて、辺りには淡く透き通った闇が静かに広がり始めていた。

「・・・でも、なんかみんな夢を諦めていくね」

と、わたしは自分も音楽の道を目指していたせいか、就職した大庭くんのことを考えると、妙に感傷的な気分になって言った。

「年齢的なものもあるし、それはしょうがないことなんだろうけど」

「そうだね」

と、久美子はいくらか気遣わしげにわたしの顔を見ると、小さな声で同意した。

「大庭くんって今いくつ？」

わたしは気になって尋ねてみた。

「二十八」

と、久美子は短く答えた。

「二十八か」

わたしはなんとなく久美子の言葉を反芻した。そしてふと天上のあたりを見上げてみた。天井の隅の方には蝶々のような形をした黒い染みがあった。

「わたしたちのあいだで誰かひとりでも、夢を叶えたやつっているのかなあ」

わたしは顔を天上の方に向けたまま、ぼんやりと呟くように言った。

でも、そう言ったわたしの言葉に、答えは返ってこなかった。代わりに、

「・・・美樹も、確か、昔音楽やってたんだよね？」

久美子は訊いてきた。

わたしは天上に向けていた顔をもとに戻すと、久美子の顔に視線を向けて、

「昔のことだよ」

と、苦笑して答えた。

「聞いてみたかったな。美樹が作った歌」

久美子は微笑してからかうように言った。

「たぶん、がっかりするだけだと思う」

わたしは軽く笑って答えると、首を振った。

店を出ると、わたしは駅まで久美子を送っていった。

「明日、見送りにいけなくてごめんね」

と、久美子は駅の改札近くで立ち止まると、わたしの顔を見て、申し訳なさそうに言った。

「明日、仕事じゃなかったら行っただけだね」

わたしは微笑んで短く首を振った。わたしは明日の朝、東京を立つ予定でいた。

「ありがとう。でも、気持ちだけでもらっとくよ。なんか改まって見送られたりすると、寂しくなっちゃうし」

「実家に帰ってもときどき連絡ちょうだいね」

と、久美子は笑顔で言った。

「うん、もちろん。たまには東京来ることあるし」

わたしは微笑んで言った。

久美子はわたしの科白に黙って頷いた。

「じゃあ、また」

と、久美子は言うど、スイカを自動改札にかざして、改札の向こう側へと歩いていった。

「今日はありがとう」

わたしは改札を抜けていく久美子の後姿に向かって声をかけた。久美子はわたしの言葉に立ち止まると、わたしの方を振り返った。

「大庭くんによろしく」

と、わたしが言うど、久美子は可笑しそうに口元を綻ばせて、頷いた。それから、

「またね」

と、手をあげて言った。

「また」

と、わたしも手をあげた。

それから、久美子は再び前に向き直ると、エレベーターに乗ってわたしの視界から消えていった。わたしは久美子の姿が見えなくなってしまっってから、しばらくのあいだ同じ場所に立ち尽くしていた。

そしてだいい経っってから、もと来た道をゆっくりと歩き始めた。

過ぎ去ってしまった季節といくつかの想い

アパートへの帰り道を歩きながら、わたしが思い出していたのは、沢田が実家に帰っていった日の夜のことだった。

あの日は、今日とは逆で、沢田がわたしのことを見送ってくれた。あの日、引越し作業を終わらせてしまったあと、わたしと沢田は沢田のおごりで夕食を食べにいった。

その帰り、沢田はわたしをアパートまで送ってくれた。わたしはどうせ近くだからいいと断ったのだが、沢田は承知しなかった。最後だから、送りたいのだと彼は言い張った。

その帰り道、わたしのアパートの前で、沢田が口にした言葉をわたしは思い出した。彼のその言葉を思い出すと、胸が痛くなった。心が一点に向かってぎゅっと収縮していくような苦しさがあった。

どうして、あるとき・・・。

八月にしては涼しい風が吹いて、頭上で葉桜が揺れる音が聞こえた。その音に耳を傾けていると、どうしてかそれは誰かの哀しい歌声のようにも聞こえた。

わたしが音楽をはじめたのは、高校のときだった。高校の文開催でライブをやるのかと友達に誘われたのが切っ掛けだった。それまでわたしは漠然と音楽をやってみたいとは思っていたのだが、でも、具体的に行動を起したことはなかった。兄がギターをやっていたので、遊び半分に教えてもらったことがあるくらいのものであった。

でも、友達と一緒に文開催でライブをやってみて、音楽とはこんなに楽しいものなのかと感動した。文字通り、魂が激しく揺さぶられるような感覚があった。それからは勉強はまるでそっちのけで友達と音楽活動に明け暮れるようになった。暇があればいつもギターの練習をしていたような気がする。

高校を卒業すると、わたしは東京にある音楽の専門学校に進学した。専門学校で学ぶことはあまりなかったが、わたしはそこで田端哲郎という同い年の男と知り合った。

背の高い、がっしりとした体格の男で、彼は伸びやかで力強い歌声を持っていた。わたしと田畑は音楽の趣味も似ていた。だから、自然とわたしと田畑は一緒に音楽活動をするようになった。

学校帰りや、バイトが終わったあとなどに、東京の街角でストリートライブをやった。わたしがギターを演奏し、彼が歌を歌うというスタイルだった。オリジナルの曲ばかりやっていたので、あまり立ち止まって聞いてくれるひとはいかなかったが、それでも田畑と夜の街角で一緒に演奏するのは楽しかった。

専門学校を卒業したあとも、わたしと田畑はアルバイトをしながらストリートライブを続けた。たまにはライブハウスで演奏するこ

ともあった。相変わらず思うように客は増えなかったが、それでもなかには熱心にわたしたちの音楽に耳を傾けてくれるひとたちも少しは現れはじめた。

翌日の早朝、引越し業者が荷物を運び出し、トラックで走り去ってしまつと、わたしはアパートの管理会社に電話をかけて、しばらくしてやってきた管理会社のひとにアパートの鍵を渡した。それで引越しは完全に終了した。

アパートのドアを閉めると、ガチャンと思つたよりも大きな音が鳴った。わたしは後ろを振り返つて、さっき閉めたばかりのアパートのドアを見つめた。もう二度と、このドアを開けることはないのだなと思うと、やっぱり、少しだけ哀しかった。

目の前の視界に、過去の色んな日々の断片が、半透明の色彩で浮かびあがって、でも、すぐ消えた。

ちょうど正午を向かえようとする日差しは強く、蝉がうるさいくらいにわめき散らしていた。アパートの前の国道に沿って植えられた桜の木々は、当たり前だが、今日わたしがこの街からいなくなってしまうことなんてどうでもよさそうな顔をして、時折吹いてくる弱い風にその濃い緑の葉を揺らしていた。

わたしは目の前の桜の木を見上げると、心のなかでバイバイと言った。

でも、もちろん、返事なんてなかった。ただ、耳元を吹きすぎていく、弱い風の音が聞こえただけだった。

わたしは愛車の赤いミニカーに乗り込むと、すぐにクーラーを全開にした。屋根のない駐車場に長いこと放置していたせいで、車のなかには熱気がこもってかなり蒸し暑かった。ついでに窓も全開にする。

この車は喫茶店に勤めているときにローンをして買った。レトロなデザインが気に入って買って、かなり愛着があったのだが、でも、もうすぐこの車も手放すつもりでいた。

仕事を辞めた今となつては、車の維持費を払っていくことなんてとてもできそうにないからだ。

でも、車を手放す前にひとだけ、わたしにはやっておきたいことがあった。この車に乗って、沢田の住んでいる兵庫県まで行くのだ。

この計画を思いついたのは、つい先日、引越しの準備中に沢田の小説を見つけたときだった。

沢田の小説を読んでいたら、無償に沢田に会いたくなった。沢田には彼が引越していつから一度も会っていないかった。何度かメールのやりとりをしたことがあるくらいのもだった。でも、そのメ

ールも、ここ一年程は全くしていなかった。

わたしは実家に帰る前に沢田に会いに行こうと思った。それも、沢田の前に突然現れて、彼を驚かせてやるのだ。突然現れたわたしの姿を見て、目を丸くする沢田の顔が今から目に浮かぶようで、可笑しかった。

出発と小さな出会い

高速道路は首都高を抜けたあたりから突然スムーズに流れはじめた。これから東名高速に乗って名古屋まで行き、それから関西方面に向かう。目的地に着くのはたぶん明日の九時か十時くらいになるだろう。

三時間ほど運転を続けると、さすがに疲れてきたので、目に付いた高速のサービスエリアに入って休憩を取ることにした。

いつ間にか日は傾きはじめていて、空の上層部に残っている僅かな青空も、空の下層部から膨張するようにゆっくりと広がっていく夕暮れの光のなかにもうすぐ飲み込まれようとしていた。

サービスエリアは平日だというのに、夏休みのせいか、混雑していた。食堂で食券を購入し、ラーメンを食べる。食べたラーメンはひどい味だったが、それでも腹が膨れたおかげで、ひと心地ついた。

自動販売機で缶コーヒーを買うと、わたしはそれを持って駐車場に止めてある車まで戻った。車に戻ると、とりあえずという感じで窓を少し開けた。車のなかは駐車しているあいだにかなり熱くなっているだろうと予想していたが、思ったほどではなかった。日が傾いたせいだろう。窓をあけると、涼しい風が入り込んできて、クーラーをつけなくてもちょうど良い感じになった。

ふと窓の外に視線を向けると、一日の終わりの美しい光が山の稜線のあいだに消えていこうとするのが見えた。わたしはそんな夕暮れの光を見つめながらさっき買ったばかりの缶コーヒーをゆっくりと飲んだ。

そういえば、ずっと昔にも一度、こんなふうに車の窓から、山の向こうに沈んでいく夕陽を見たことがあるな、と、わたしはふと思いついた。季節は夏。確か海に行った帰りだ。

あれは専門学校を卒業した最初の年のことで、どちらから言い出したのか、わたしと田畑のふたりで海に行ったのだ。

そして、海で泳いで帰る途中、ちょうどこんなふうにドライブインに入って休憩した。そのときに、車のなかから田畑とふたりで窓の外に広がる夕闇を観のた。

そのとき、わたしは田畑とどんな話をしたのだろう。思い出そうとしたが、全く思い出せなかった。今度のライブの予定でも話したのかもしれない。

田畑は今頃どこでどうしているのだろうか、と、わたしは思った。田畑のことを思い出すと、懐かしくなるのと同時に、心が鈍く疼いた。

わたしは田畑に出会った瞬間から田畑に憧れていた。好きだったとても。その笑ったときの少年のような笑顔や、ふとした仕草や、声が好きだった。

何度か、わたしは田畑にそんな自分の想いを告げようと思ったことがある。でも、どうしても、できなかった。田畑が自分のことを

女として見ていないのがわかっていたし、自分の思いを告げること
で、田畑との心地の良い関係が壊れてしまうのが、怖かったのだ。
それに、田畑にはわたし以外にべつに好きなひとがいることもわか
っていた。

食事を取ったせいか、車のシートに身体をもたせかけていると、
急速に瞼が重くなつてくのを感じた。目を閉じると、わたしの意識
はそのまま闇に飲み込まれるようにしてプツリと消滅した。

コンコン、と窓を軽く叩く音でわたし目を覚ました。窓の方を見
てみると、若い女の子が車の外からこちらを覗き込むようにしてい
る。

わたしが彼女の存在に気がついたことを確認すると、
「すみません」

と、彼女は車の外で言った。

わたしは少しだけ空けていた窓を全開にした。車の外に立ってい
るのは二十歳前後の女の子だった。

「どうしたの？」

と、わたしが尋ねると、彼女はわたしがどこまで行く予定かと尋
ねきた。わたしは関西方面に向かう予定だと答えた。すると、彼女
は安堵したような表情を浮かべて、

「もし良かったら途中まで乗せていつてもらえませんか？」
と、唐突に言った。

わたしはまさか自分がヒッチハイクされるとは思っていなかった
ので少しびっくりしたけれど、すぐにいいよと答えた。見たところ、
彼女を自分の車に乗せても問題はなさそうに思えた。

「ありがとうございます！」

と、彼女はわたしの返事がよほど嬉しかったのか、大きな声で言
った。

わたしたちはお互いに簡単に自己紹介を交わした。

彼女の名前は佐藤可奈といい、年齢は二十一歳で、京都に住んで
いるらしかった。

彼女は一週間ほど前から東京で一人暮らしをしている恋人のもと
に夏休みを利用して遊びにきていたようだった。そして、今日は恋
人と一緒に静岡方面にドライブに出かけていたらしいのだが、でも、
そのドライブの途中で大喧嘩をしまった彼女は、途中で恋人の
車を降りると、こうしてヒッチハイクをして地元の京都まで戻ること
にしたという話だった。

「恋人と喧嘩して地元に戻ることにしたのはわかるけど、でも、だ
からってなにもヒッチハイクして帰ることにしなくても良かったん

じゃない？」

わたしは彼女の話聞き終わると、驚いて言った。

「だって、女の子ひとりじゃ色々危ないでしょ」

「でも、仕方なかったんです」

と、佐藤可奈はわたしの言葉を遮るように言った。

「彼氏と口論になったのって高速に入ってからだったし、だから、わたし、高速のドライブインに入ったとき、彼氏にここで降りしてって言ったんです。アイツの顔なんて二度とみたくないって思ったし、もう一緒に居るのも嫌だったから……」

「それで、佐藤さんの彼氏は、あっさりとあなたのことを降ろしたわけ？」

わたしは佐藤可奈の無謀さに呆れながら、一方で彼女の恋人の無責任さにも疑問を覚えた。彼は自分の恋人を高速のサービスエリアに置き去りにすることになったの抵抗も感じなかったのだろうか。

わたしの問かけに、佐藤可奈は弱く首を振った。

「一応、アイツは引き止めてくれました。実家に帰るのはいいけど、でも、一度一緒に東京に帰ってからにすればって」

「だったらどうして」

と、わたしが口を開きかけたところで、佐藤可奈は少し早く口にした。

「でも、もうとにかく、アイツと一緒に空間に居るのは嫌だったんです。だから……」

「だから、あなたは恋人の制止ふりきって、ヒッチハイクをすることにした」

と、わたしが佐藤可奈の言葉を引き継ぐと、彼女はそうだというようにこくりと頷いた。

「そっか」

と、わたしは頷いた。そして心のなかで若いなあと微笑するように思った。

「それで？」

と、わたしは少しの沈黙のあとでなんとなく気になって尋ねてみた。

「わたしはヒッチハイクをはじめてから、何人目の人間なの？」

佐藤可奈は一瞬わたしの問の意味がわからなかったようで、ぼんやりとわたしの顔に視線を彷徨わせた。そして、やや間をおいてから、
「大塚さんがはじめてです」
と、慌てたように答えた。

「大塚さんに声をかけてやっと成功したんです」
と、彼女は言った。

「彼氏に降ろしてもらったサービスエリアがここで、そのあとすぐに誰かに乗せてもらおうと思ったんだけど、なかなか乗せてくれるひとが見つからなかったんです。男のひとだと何かあったら怖いし、できれば女の人がいいなと思って選り好みしたら、なかなか思うようにいかなくて」

「そしたら、上手い具合にわたしが車のなかでひとりで寝てたわけね？」

わたしは軽く笑って言った。

佐藤可奈はわたしにつられるようにして口元を笑みの形に変える

と、頷いた。

「でも、わたしに声をかけて正解だよ」

と、わたしは微笑んで言った。

「わたしは自分で言うのもなんだけど、結構まともな人間だし、レスビアンでもないし。だから、間違ってもあなたのことを襲ったりはしないから」

佐藤可奈はそう言ったわたしの顔を、いくらか不思議そうに見つめたあと、すぐに噴出すような明るい表情で頷いた。

佐藤可奈の話

「それで？何が原因で彼氏と喧嘩になったの？」

わたしは車を走らせてしばらくしてから尋ねてみた。

佐藤可奈はわたしの問に、ゆっくりと振り向いてわたしの顔を見た。それから、すぐに視線を前方に戻すと、

「べつにそんな大したことじゃないんです」

と、彼女は短く答えた。でも、そう答えた彼女の表情はついさっきまでしていた喧嘩のことが心を過ぎったのか、強張った表情になっていた。

「アイツが・・・彼氏が、約束を破ったんです」

と、佐藤可奈は続けた。

「約束？」

と、わたしは彼女の方にちらりと視線を走らせた。

わたしの言葉に、佐藤可奈は軽く頷いてみせた。

「来月、わたし、誕生日なんです。だから、その日は彼氏がわたしに会いに京都まで来てくれる約束になってたんです・・・でも、それなのに、彼氏が、突然その日は行けなくなりそうだって言い出して」

「どうして佐藤さんの彼氏はその日、駄目になっちゃたの？」

わたしは気になったので尋ねてみた。

「・・・仕事だって、彼氏は言っていました」

彼女は納得していないような表情で短く答えた。

「わたしの彼氏、わたしよりも三つ年上で、京都の大学を卒業したあと、東京の会社で働いてるんですけど」

と、佐藤可奈は付け加えて言った。

「なるほどねえ」

と、わたしは相槌を打った。

「仕事なら仕方がないのかな」

と、わたしが呟くように続けると、

「だけど」

と、佐藤可奈は不満そうに声を大きくして言った。

「ずっと前から約束してたんですよ。その日はふたりで色んなところに行こうって計画してて。わたしすごく楽しみにしてたのに・・・それなのに。仕事だから仕方がないのはわかるけど・・・でも」

佐藤可奈はいくらか小さな声で早口に言った。

わたしは彼女の科白に耳を傾けながら、でも、確かに心待ちしていた約束を一方的反故されてしまうのは、納得できないかもしれないな、と、思った。いや、納得できないというよりは、哀しいのかもしれない。わたしは幼い頃、休みの日に遊園地に連れていってもらえるはずだったのに、急遽父の仕事の関係で連れていってもらえなかった日のことを思い出した。

「それで喧嘩になったんだ？」

と、わたしが先を促すと、佐藤可奈は気落ちしたような表情で弱く頷いた。

「最初はわたしもそこまで彼氏のことを責めつもりはなかったんです。仕事だから仕方がないのはわかってたし・・・」

佐藤可奈は軽く眼差しを伏せながら言い訳するように言った。

「だけど、彼氏は、自分が約束を破ったことをあまり悪いと思ってるような感じじゃなくて、仕事だから仕方ないだろみたいな言い方なんです。ただ、ごめんって謝ってるだけみたいな感じがして・・・それでだんだん腹がたってきちゃって・・・気がついたら口論になってました。もう売り言葉に買い言葉みたいな感じになって。ほんとにムカツイてきちゃって」

「そして最終的にここで車から降ろしてって言っちゃったのね？」
と、わたしが微笑んでからかうように尋ねると、彼女は黙って頷いた。

しばらくの沈黙があった。沈黙のなかに車のタイヤが高速道路を走っていく単調な音が響いた。

「でも、これからどうするの？」
わたしは尋ねてみた。

佐藤可奈はわたしの間に意味がわからなかったのか、それまで伏せていた眼差しを上げると、振り向いてわたしの横顔に視線を向けた。

「佐藤さんはこれでもう彼氏とは別れるつもりなの？」
彼女はそう問いかけたわたしの顔を少しのあいだじっと見つめて

いた。それから、顔を窓の方に向けると、
「・・・わからない」
と、少し小さな声で答えた。

たぶん、疲れていたのだろう。それからしばらくすると、佐藤可奈は車の窓に頭をもたせかけけるようにして眠ってしまった。瞳を閉じた彼女の顔は寂しそうに見えた。

わたしはすっかり日が暮れて真っ暗になってしまった高速道路を黙って運転し続けた。

道路は混雑することなく快適に運転することができた。このペー
スでいけば、思っていたよりもずっと早く関西方面に辿り着くことができそうだった。

佐藤可奈を拾ったドライブインを出てから、わたしはそのまま二時間程車を走らせ続けた。

そのうちにだんだん瞼が重くなってきたので、わたしは適当なドライブインに入って仮眠を取ることにした。

ドライブインに入り、車のエンジンを止めたところで、佐藤可奈が微かにうめくような声を出して目を覚ました。

「ごめん起しちゃった？」

わたしは佐藤可奈の方を振り向くと、眠たそうに目を擦っている

彼女に声をかけた。

佐藤可奈は一瞬今の自分のおかれている状況が理解できなかったらしく、戸惑ったような表情を浮かべていたけれど、

「ごめんなさい」

と、すぐに申し訳なそうに謝った。

「わたし、いつの間にか眠っちゃって。ヒッチハイクなんてしていきながら、すみません」

「気になくしていいよ」

と、わたしは微笑んで言った。

「いまどこらへんですか？」

と、佐藤可奈はあたりをきよろきよると見回すと、不思議そうに言った。

「名古屋を通り過ぎて少し行っただくらいかな」

「だいぶ関西に近づいたんですね」

と、佐藤可奈は感心したように頷いた。

「道路が空いてたからね。だいぶ距離を稼げたよ。このぶんだと早く着きそう」

「そっか」

「わたしはちょっと疲れちゃったから、仮眠を取るよ」

わたしは車の座席を倒しながら言った。

「ごめんなさい」

と、佐藤可奈は気を使ったように言った。

「わたしが運転代わってあげられたら良かったんだけど、わたし、運転免許持つてなくて」

「だから、気にしないでいいって」

わたしは微笑みかけて言った。

「佐藤さんも眠ったら？」

と、わたしは促してみた。すると、彼女はそうですねと頷いて、わたしと同じように車の座席を倒した。

沈黙があつて、沈黙のなかに近くで鳴いているらしい澄んだ虫の鳴き声が聞こえた。

「・・・もうすぐ夏も終わりですね」

と、虫の鳴き声を耳にしたせいか、佐藤可奈は名残惜しそうに言った。

「そうだね」

と、わたしは車のなかの、月の光を含んで、微かに青味がかった闇を見つめながら相槌を打った。

「大塚さんって、季節のなかでどの季節が一番好きですか？」

と、佐藤可奈はふと思いついたように尋ねてきた。

わたしが答えを考えていると、

「わたしは夏が一番好きなんですよね」

と、佐藤可奈は言葉を続けた。

「夏って暑くて過ごしにくいけど、何か楽しいことが一杯あるようなイメージがあつて」

ちらりと佐藤可奈の方に視線を向けてみると、彼女の口元は淡く笑みの形に広がっていた。きっと楽しかった夏のことも思い出しているのだろう。

「わたしも夏は好きだよ」

と、わたしそんな佐藤可奈の幸せそうな笑顔を見ているうちに、微笑ましい気持ちになって言った。

「ほんとですか？」

佐藤可奈は弾んだ声を出した。

花火。お祭り。海水浴。スイカ。濃い緑の木々。それから、みんなの明るい笑い声。そんなものを、わたしは夏という言葉から連想した。そして、それらのものを連想することは、何故かしらわたしの気持ちに水気を含ませていった。

「ああ、ほんとに夏が終わって欲しくないなあ」

と、佐藤可奈は心からそう思っているように、しみじみとした口調で言った。

「確かに夏が終わると寂しい気持ちになるもんね」

と、わたしは小さく笑って相槌を打った。

佐藤可奈はわたしの言葉に頷いた。それから、彼女は少しのあいだ黙って何かを考えている様子でいたけれど、

「・・・アイツにはじめてあったのも夏だったんですね」

と、独り言なのか、呟くような声で言った。

「アイツって、今日喧嘩別れした彼氏のこと？」

と、わたしが確認を取ってみると、佐藤可奈は頷いた。

「友達の友達だったんです。彼氏」

「へー」

と、答えようがなかったので、わたしは佐藤可奈の言葉にただ相槌を打った。

「友達が今度ライブやるから来ないって友達に誘われてライブに行っただけです、そこで歌を歌ってたのが彼氏だったんです」

「バンドマンだったんだ。佐藤さんの彼氏」

わたしは佐藤可奈の恋人に、自分との思わぬ共通項を見出して、急に親近感を覚えた。

「バンドマンっていうか、彼氏の場合はひとりで弾き語りをするみたいな感じだったけど」

と、佐藤可奈は小さな声で言った。

「オリジナルの曲をやってたの？佐藤さんの彼氏は？」

わたしは興味をひかれて尋ねてみた。

すると、彼女は頷いた。

「結構激しい感じの曲？」

と、更にわたしが尋ねてみると、佐藤可奈は短く首を振って、

「どちらかというと、スローテンポな曲。優しい感じの歌が多かったかな」

と、彼女は彼氏が歌を歌っているところを思い浮かべているのか、宙のあたりを見つめながら答えた。

「それで、ライブハウスではじめて彼氏の歌声を聞いた瞬間に、あ

あ、すごくいい曲だなあって思っで。それでバカみただけで、わたし彼氏のこと好きになっちゃったんです。それから、友達に彼氏のことを紹介してもらって、頑張っで告白して」

「佐藤さんって意外と積極的なんだね」

と、わたしが笑っでからかうと、佐藤可奈は恥ずかしそうに微笑して、

「なんかそのときは勢いがあっで頑張れたんですよ」

と、いいわけするように言っで。

「そっか」

と、わたしは微笑んで頷くと、それから、

「彼氏はもう音楽はやっでないの？」

と、なんとなく尋ねてみた。

すると、佐藤可奈はいくらか難しい表情を浮かべて頷いた。

「大学卒業と同時に止めちゃっでたみたいです。最初の頃はプロになることを目指してたみたいなんですけど、途中で自分にはそこまでの才能はないって気がついたので」

「そっか」

「・・・その彼氏の言葉を聞いたとき、なんで彼氏はそこで簡単に諦めちゃうんだろっかとっでわたしもまだ若かったから思っでたけど」

佐藤可奈は俯き加減に言っで。

「でも、わたしも齡をとっでみて・・・歳をとっでみてっでいっでてもまだ二十一とかだけだ、現実っでなかなか上手くないものだっでわかって・・・だから、彼氏が諦めるのも無理はないかなっでっで最近は思っです」

と、佐藤可奈はそう言葉を続けると、わたしの方を振り向いて、何かいいわけするように曖昧に口元を笑みの形に変えた。

「そうだね」

と、わたしは曖昧に微笑んで頷いた。

しばらくすると、彼女の寝息が聞こえてきた。ほんとに良く寝る娘だな、と、可笑しくなりながら、わたしも瞳を閉じた。そして瞳を閉じながらわたしが思い出したのは、二年ほど前にした田畑との会話だった。わたしたちが音楽を辞めることを決意したときのこと。

田畑の話

「なあ、そろそろ俺らも潮時なんじゃないかなあ」

田畑がそう呟くような声で言ったのは、いつものようにスタジオで練習を終えたあとのことだった。

「潮時って？」

田畑が言わんとしていることの意味はわかったけれど、わたしは敢えてわからなかったふりをした。

田畑はわたしの顔をじっと見つめた。そしてそれからすぐに顔を伏せるようにして眼差しを逸らすと、

「だから、その、俺たち、そろそろ音楽なんか辞めたほうがいいんじゃないかって」

と、言い難そうに言った。

わたしが田畑の言葉に黙っていると、

「今年で俺らが音楽をはじめてもう六年目だろ？」

と、田畑は眼差しを伏せたまま言葉を続けた。

「だけど、なにひとつ目に見えた結果なんて出せてないじゃん」

わたしが田畑の言葉に黙っていると、

「だから、そろそろ区切りをつけたほうがいいんじゃないかって思うんだ」

と、田畑は弱い声で言った。

「・・・俺も来年で二十八だしさ、そろそろ現実を見たほうがいいのかもなっ」

わたしは田畑の言葉に何か言わなきゃ、答えなければと思ったが、自分の気持ちが入手くまとまらなかった。田畑が口にした言葉の意味は、わたしにもよくわかった。わたし自身も田畑と似たようなことを考えることはよくあった。わたしももう二十七歳で、かつてのように無邪気に自分の可能性を信じられるほど若くはなかった。そろそろ現実を見るべきなのかもしれないとは思っていた。でも、その一方で、自分の夢を諦めたくないという気持ちも、どうしようもなくあった。だから、そのふたつの気持ちが開きあって、わたしは自分の意見を口にすることができなかった。

「もちろん」

と、田畑はわたしが黙っているの、わたしが音楽を辞めたくないと思っっていると思っただろう、気を使うように続けた。

「もちろん、そのことをお前に強要するもりはないよ。お前がもしまだこれからも音楽を続けていきたいって思ってるんだったら続けてくれ・・・ただ、俺はそろそろ違う生き方を模索してみてもいいかなって思ってるんだ」

「・・・そんなの、勝手じゃん」

と、わたしは数秒間をおいてから少し小さな声で言った。

「わたしはどうすればいいの？」

田畑はそれまで伏せていた顔をあげると、わたしの顔を見つめた。

「あんたがいなくなつて、わたしはひとりでどうやって音楽を続けていけばいいの？」

言いながら、まるで子供がだだをこねているみたいだなと思わないでもなかったが、しかし、田畑の音楽がやりたかったらひとりで続けてくれという言葉は、わたしにとつてあまりにも冷たい言葉のように感じられた。少なくとも、そういうことを決めるのは、わたしに相談してからにすべきなんじゃないのかと思った。

「それは」

と、田畑はわたしの言葉に少し言いよんどから、

「誰かべつのひとを見つけてもらうしかないのかな・・・悪いとは思うけど」

と、田畑は申し訳なそうに言った。そしてそれから、

「・・・それに、お前ぐらいしつかりした技術があれば、お前と一緒に音楽をやりたいと思うやつなんていくらでも見つかるだろう」

と、励ますつもりで言っているのか、わたしの気持ちをまるで無視した言葉を田畑は口にした。

わたしは田畑の言葉に黙っていた。わたしが一緒に音楽をやりたいと思うのは、あんたなんだよ、と、わたしは田畑に向かって叫んでやりたいような衝動に駆られたが、でも、どうにかその言葉を飲み込んだ。代わりに、

「なんかあつたの？」

と、尋ねてみた。

わたしの知る限り、はじめてだったのだ。田畑が音楽を辞めたい口にするのを聞いたのは。これまで田畑が音楽を辞めたいと口にしたことは一度もなかった。だから、田畑が急に音楽を辞めようと決意するに至ったのには、何か特別な理由でもあるのだろうかと思ひなつたのだ。

田畑はわたしの顔を見た。そしてその瞳をすぐに逸らすと、僅かに逡巡するように間をあけてから彼は話はじめた。

田畑の話したことをまとめるとだいたいこういうことになった。

田畑にはずっと昔から片思いをしている女性がひとりいた。

そのひとは高校のときのクラスメートで、田畑は高校を卒業したあとも、そのひとと友達として親しく接していた。ときにはふたりきりで食事に行ったり、映画を観にいたりするようなこともあった。

でも、田畑と彼女の関係は、あくまで、仲の良い友達としてのそれだった。それ以上でもそれ以下でもなかった。というのも、そのひとには田畑とはべつに恋人がいたからだ。

その恋人は、彼女よりもふたつ年上の男だった。そして彼女は田畑が彼女のことを思うのと同じように、あるいはそれ以上に、恋人のことを深く愛しているようだった。だから、田畑はそんな彼女の想いを知っているだけに、わざわざ自分の気持ちを彼女に伝えようという気持ちにはなれなかった。

なぜなら、そんなことをしても無駄なだけなのはわかりきってい

たし、なにより、自分の思いを告げることで、彼女の気持ちを急に混乱させたり、傷つけたりしたくなかったのだ。それくらいならば、いっそ自分の想いは心のなかにそっとしまったままでいようと田畑は思った。

田畑は高校を卒業すると、専門学校で知り合った、自分に好意を寄せてくれた女の子と付き合うようになった。そのときも田畑は高校のときに知り合ったひとのことが好きだったのだが、誰か他のひとと付き合えば、彼女のことを忘れることができるかもしれないと思ったのだ。

でも、結果として、それは失敗に終わった。専門学校で知り合った恋人のことをそれなりに好きになることはできたが、でも、それは本当の意味で誰かを好きになるのとは違った。

そんな田畑の気持ちを見透かしたように、一年ほどもすると、専門学校で知り合った女の子は田畑のもとを離れていった。

その次はアルバイト先で知り合った大学生の女の子と付き合うようになった。でも、そのひとともやはり最初に付き合った女の子と同じように、上手くいかなかった。田畑が彼女の気持ちと真剣に向き合うことができずにいるうちに、恋人の方がそのことを悟ったように静かに田畑のもとを去っていくのだ。

そういうことが何度続いたあと、田畑は恋人を作るのはやめた。きつと自分は高校のときに知り合った彼女以外のひとを好きになることはできないのだろう、と、思った。無理に自分に好意を寄せてくれたひとと付き合って、そのひとを傷つけてしまうのは、田畑の本意ではなかった。それくらいならいっそずっとひとりだけで、高校のときに好きだったひとのことを思い続けていようと決意した。

孤独といえば孤独な気もしたが、でも、田畑には恋愛以外にも、音楽という情熱を注げるものがあつたので、それほど惨めな気持ちにならなかつた。

そのようにして三年ほどの月日が流れた。

田畑が、高校のときに好きだつたひとが精神的に不安定になつてゐるという話を友人から聞かされたのは、半年前の正月に実家のある鳥取に帰省したときだつた。

田畑はこのところ彼女とは疎遠になつていたので、その事実を全く知らなかつた。詳しく話を聞いてみると、彼女は高校のときから付き合つてゐる恋人と大学を卒業してからも付き合い続けていて、結婚する話までしていたということだつた。

でも、ある日突然、その話は流れてしまった。彼女の恋人が他に恋人を作つて、そのひとのもとにいつてしまったのだ。

結婚する話までしていたのに、恋人に裏切られてしまった彼女は、これ以上はないというくらい深く傷つくことになつた。それはある意味では事故や病気で恋人を失つてしまうよりもなお辛いことだつた。

そんな彼女においうちをかけるように、彼女の勤めている高校で（彼女は高校で数学の教師をしていた）あらぬ噂が流れはじめた。それは、彼女が生徒のひとりと恋愛関係にあるという噂だつた。

彼女はすぐにその噂を否定したし、それが原因で彼女がなんらかの処分を受けるようなことはなかつたのだが、しかし、彼女のこと

を噂する声はなくならなかった。むしろ、どんどん噂は尾ひれをつけて広がっていて、しまいには彼女がアドルトビデオに出演しているという噂まで流れ出す始末だった。

最初のうちは笑って気丈にふるまっていた彼女も、そのうちにそういった心ない声を見無視することができなくなっていた。おまけに、彼女は心から愛していた恋人にひどい裏切られ方をされたばかりだった。

次第に彼女は学校に行くのが辛くなり、教師の職を辞職して、実家の家にひきこもるようになっていった。彼女は他人を信用することができなくなり、無気力になっていった。もう何かもがどうでもいいと厭世的な気持ちになっていった。そんな彼女を励まそうと彼女の友達が彼女を訪ねてきてくれたが、彼女は誰も会おうとはしなかった。

幻聴がはじまったのは、実家に引きこもるようになって半年程が経った秋のことだった。彼女がひとりで自分の部屋でいると、目に見みなえい誰かが自分の耳元でずっと自分の悪口を言う声が聞こえるのだ。

彼女はその声を振り払おうと怒鳴り散らす。でも、そうしてもどうにもならない。幻聴はますますひどくなっていく。

事大を重くみた彼女の両親は彼女を精神病院につれていった。そしてその精神病院で彼女は半年ほど治療を受け、今はどうにか比較的に病状も安定して、実家に戻ってきているという話だった。

田畑は友人からその話をきいて言葉を失ってしまった。自分の知らないところで、自分の好きなひとがそんなにも辛い目にあっている

たのかと思うと、東京にいてのうのとギターを弾いて、好きなことをやっていた自分が許せない気持ちになった。どうして自分は彼女がそんなに精神的追い詰められているときに、彼女の側にいてやれなかったのだ、と、悔しかった。

田畑は翌日彼女の実家を訪ねていくと、彼女の両親に会って、彼女との面会を申し込んだ。でも、彼女は田畑とは会おうとはしなかった。ひとりにさせて欲しいということだった。

それでも田畑は諦めきれずに、毎日のように彼女の家に通い続けた。正月が終わり、東京に戻ってからも、暇を見つけては鳥取に帰り、彼女の実家に通い続けた。そして田畑のそんな熱心の思いが通じたのか、最近になってようやく田畑は彼女と会うことができたという話だった。

「・・・久しぶりに会った彼女は、正直まるで別人だったよ」

と、田畑はいくらか憔悴したような表情でわたしの顔を見ると言っ

た。「表所が暗くてさ、常に何かに怯えてるような感じなんだ・・・頬のあたりもやつれてるし・・・辛かったよ、そんな彼女を見ているのは」

「・・・そっか」

と、わたしは田畑の話に相槌を打った。田畑の話に何をどんなふうに感想を述べればいいのかわからなかった。

「・・・なんでなんだろうな」

と、少しの沈黙のあとで、田畑は俯き加減に弱い声で言った。

わたしは田畑の言葉の続きを待つて黙っていた。

「なんでこんなことが起るんだろう」

田畑はつくづく納得できないというように言った。

「・・・なんでアイツがそんな目に合わなきゃいけないんだろう」

田畑はそれまで伏せていた眼差しをあげてわたしの顔を見ると、わたしに向かって抗議するように言った。

「・・・まださ、俺の音楽が、どんなに頑張っても芽がでないのは、わかるよ。才能がなかったんだなって納得もできる・・・だけどさ・・・」

田畑はそこまで口にする、また顔を俯けて黙った。

田畑の言いたいことはわかるような気がした。人生にはときどき理不尽とは思えないようなことが起る。なんでと抗議したくなるようなことが起る。でも、わたしたちにはどうすることもできない。わたしたちはあまりにも無力だ。ただ、その現実を受け入れて、その現実なかでどうにか生きていくしかない。

「だからさ」

と、いくらか長い沈黙のあとで、田畑は口を開くと言った。

「俺、実家に帰って彼女の側にいてあげたいと思うんだ・・・おじさんが酒屋やってて、そこで働かないかって話があつて」

田畑は顔を俯けたまま申し訳なさそうに言った。

「わかったよ」

と、わたしは顔を俯けたままにいる田畑の顔に視線を向けると、できるだけ優しい口調で言った。

「そついうことなら仕方がないね」

田畑は俯けていた顔をあげると、少し驚いたようにわたしの顔を見つめた。わたしがそんなにあっさりと納得するとは思っていないかったのだろう。

「そのひとが、少しでも早く立ち直れるように、側にいてあげてよ。わたしは微笑みかけて、静かに言った。

佐藤可奈の思い出

だけど、でも、正直なことを言えば、わたしは彼女のことを羨ましかった。田畑が高校のときからずっと好きでいるという彼女のことが。

確かに、最愛のひとに裏切られるのは辛いだろう。ありもしない噂をたてられて、不当に蔑まれるのは我慢できないかもしれない。なんで自分の身にこんなことが起こらなければならないのかと運命を呪いたいような気持ちになったかもしれない。

だけど、それでも、田畑が自分のことを好きでいてくれるのなら、わたしはそれらの不幸を進んで受け入れてもいいような気がした。

一寸先も見えないような深い暗闇のなかでも、田畑が側にいて、自分のことを想っていてくれるのなら、生きていける、惨めな感傷かもしれないけど、わたしはそんなふうに思わずにはいられなかった。

目を覚ますと、腕時計の針は午前四時を少し過ぎたくらいを指していた。夏とはいえさすがにまだ暗かったが、その闇のなかにもほんのわずかに朝日の光が混ざりはじめていて、寝る前に見た闇と、

今の闇では少し濃度が違っているような気がした。ふとなりを振り返ってみると、佐藤可奈はまだ気持ち良さそうに寝息を立てていた。

わたしは座席の上で大きく伸びをすると、座席をもとの状態に戻した。そして車のエンジンをかける。夜が明けきってしまうまでにもう少し距離を稼いでおこうと思った。

車を走らせてしばらくしても、佐藤可奈は瞳を閉じたままで、起きだす気配はなかった。それにしてもよく寝る娘だなと可笑しくなる。わたしと出会ってからほとんどの時間を寝て過ごしているんじゃないだろうか。起すのも悪いので、そのままにしておくことにした。

佐藤可奈といえば、ただの偶然の一致だが、わたしには過去に佐藤可奈という同姓同名の友人がいたことがあった。それは小学校高学年のときのこと、彼女はわたしのクラスに転校生として入ってきたのだった。

彼女は髪の長い、色白の、綺麗な二重の瞳をした、比較的顔立ちの整った女の子だった。彼女はわりと物静かな娘だったので、仲良くなるまでにしばらく時間がかかったのだが、ふとしたことが切っ掛けでわたしたちは友達になった。

それはある日の放課後のことだった。わたしが放課後、忘れ物を取りに教室に戻ると、綺麗な、でも、少しだけ哀しい感じのするピアノの音が聞こえてきたのだ。

最初は音楽の先生がピアノを弾いているのだろうかとも思ったの

だが、でも、ピアノ音が聞こえてくるのは音楽室の方からではなかったもので、どうやら音楽の先生が弾いているわけではなさそうだった。というのは、音楽の先生がピアノを弾くのなら、自分の事務所がすぐ隣にある音楽室で弾くはずだからだ。

ピアノが置いてある教室は、音楽室以外にも、もうひとつあって、どうやらピアノの音はその教室から聞こえてくるようだった。その教室は準備津になっている、普段は使われていない教室だった。昔、もつと生徒の数がたくさんいた頃は音楽室として使われていたこともあるらしいのだが、今はその頃の名残なのか、古いアップライトピアノが忘れさられてしまったように、ひとつだけぼんとおかれているだけだった。

わたしは誰かピアノを弾いているのか気になったので、少し怖いような（幽霊がピアノを弾いているのを見たという噂があった）気もしたけれど、思い切ってその教室までいってみることにした。

教室の窓から恐る恐るなかを覗いてみると、そこでピアノを弾いていたのは、最近わたしのクラスに転校してきたばかりの、佐藤可奈という名前の女の子だった。わたしは彼女とは何かの用事があったて二言三言話したことがあるくらいのもので、教室のドアを開けて声をかけたものかどうかすぐく迷った。

でも、彼女の弾くピアノがあまりにも上手で、あまりにも素敵だったので、そのことを伝えたくて、わたしは思い切って教室のドアをあけた。

わたしが教室のドアを開けると、きつと驚いたのだろう、転校生はピアノを弾くのをやめてしまった。そして教室のドアの方を振り返ってわたしの顔を見た。

わたしは彼女と目が合った。早く何か言わなきゃと思うのだが、変に緊張してしまって上手く言葉がでてこなかった。すると、佐藤可奈の方が先に口を開いた。

「ごめんなさい」

と、少し小さな声で佐藤可奈は言った。

「ピアノがあったから、勝手に弾いてたの。いけなかった？」

佐藤可奈はどこか怯えたような表情でわたしの顔を見ると言った。

わたしは彼女の言葉に首を振った。そしてそれから、

「違うの」

と、わたしは慌てて言った。

「教室にリコーダーを取りにもどったら、すごく綺麗な演奏が聞こえてくるから、誰が弾いてるんだろうって気になって」

わたしは言いながら、ゆつくりと佐藤可奈の側に近づいていった。彼女はそんなわたしを、まるで小動物が見たことのない生物を警戒するような顔つきで見っていた。

「すごく上手だね、ピアノ」

わたしは彼女のとなりに立つと、そう微笑みかけて言った。

「ありがとう」

彼女はわたしの言葉に、少しぎこちなく口元を笑みの形に変え、と、恥ずかしそうに答えた。

「わたしもピアノの習いたかったんだけど、うちの家ピアノないし、貧乏だし、だから、習わしてもらえなかったんだ」

わたしは彼女の警戒をこうとひとりで喋り続けた。

「すごく小さい頃からピアノ習ってるの？」
と、わたしは尋ねてみた。

すると、彼女はわたしの問に短く頷いた。

「お母さんがピアノの先生やってたの。だから、もう小さな頃から
そう答えた彼女の声は、なぜかしら哀しそうにも響いた。

「そっか」

と、わたしは彼女の答えに頷くと、ちよつと躊躇ってから、

「ねえ、良かったら一緒に帰らない？」

と、誘ってみた。

すると、彼女は心持戸惑ったような、それでもいくらかは嬉しそ
うな表情で、

「うん」

と、頷いた。

その日の学校からの帰り道、わたしたちははじめてたくさんのか
とを話した。話していくなかでわかったことは、彼女が父親の仕事
の関係で頻繁に引越しを繰り返しているということだった。この前
は九州の田舎の方に住んでいたという話だった。

「じゃあ、結構大変でしょう？そんなにしょっちゅう引越ししてた
ら友達だつてなかなかできないだろうし」

わたしが心配して言うと、彼女はちよつと難しい顔をして黙って、
それから、

「でも、もう慣れちゃったから」

と、わたしの顔を見て、どこか哀しそうな笑顔で小さく笑った。

「そっか」

と、わたしはどう言っていたいいのかわからなくて、足元の地面を見つめながら曖昧に頷いた。少しの沈黙があつて、最近になって鳴きだした蝉の声が聞こえた。季節は六月の終わりで、もうすぐ夏がはじまろうとしていた。

「いつもあやつて、放課後ピアノ弾いているの？」

しばらくの沈黙のあとで、わたしはとなりを歩いている彼女の横顔に視線を向けると尋ねてみた。

すると、彼女はうんと頷いた。最近になってあの教室に誰も使っていないピアノがあるのを見つけて、それでひとりでこっそり弾いていたのだ、と、彼女は語った。

「わたし、あんまり家に早く帰りたくないの」

と、彼女はいいわけするように言った。声の底に淡い影がついているような声だった。

「どうせ帰っても誰もいないから。わたし一人っ子だし。ピアノだって、いま家にピアノないから、学校じゃないと弾けないの」

「えっ？でも、さっきお母さんがピアノの先生をやってるって言ってなかった？」

わたしは不思議に思って尋ねた。

「・・・そうなんだけど」

と、彼女は少し目を伏せて迷うような答え方をした。

あまり触れ欲しくない話題なのかと思ったわたしは慌てて、

「ごめん。答えたくないことだったら無理に答えなくてもいいから」と、取り繕うように小さく笑って言った。

彼女は伏せていた眼差しを上げてわたしの顔を見ると、

「べつにそういうわけじゃなんいけど・・・」

と、呟くような声で言って、結局その話はうやむやに流れてしまった。

その日以来、わたしと彼女は学校が終わったあとや、休みの日などによく一緒に遊ぶようになった。放課後は大抵わたしと彼女が知り合ったあの教室で、彼女がピアノを弾いているのをわたしが聴いているということが多かった。

彼女のピアノの演奏はほんとうに素敵だった。淡い水色の色彩がついているような、透明で、静かな感じのする、綺麗な演奏だった。だけど、でも、その演奏は聞いていると、どうしても、少し哀しい感じがしてしまうのだった。何度か、その原因について彼女に尋ねてみようと思ったことがあるのだが、でも、できなかった。なんとなく、そのことには触れていた方がいいような気がしたのだ。

そのうちにわたしも彼女にピアノを教わるようになった。最初は思うように指が動かなくてイライラしたのだが、彼女が丁寧に、我慢強く教えてくれているうちに、だいぶマシになってきた。簡単な曲であれば弾くことができるようになった。

彼女はそんなわたしを見て、美樹ちゃんは飲み込みが早いよと言

って褒めてくれた。それでわたしもすっかり得意になって、もしかしたらわたしには特別な才能が備わっているんじゃないかと本気で思い出す始末だった。

「可奈ちゃんは将来はピアニストになるんでしょう？」

と、彼女がピアノを弾き終えたあと、あるとき、わたしはふと彼女に尋ねてみた。彼女のピアノの演奏はほんとうに素晴らしいかったし、彼女自身もピアノを弾くことを楽しんでいるようだったので、わたしは当然彼女はピアニストになることを目指しているのだろうと思いついていたのだ。

彼女はわたしの間に、自分の両手の掌に視線を落とすと、

「そうなたら素敵だろうな」

と、呟くような声で言つて、それから、眼差しあけでわたしの顔を見ると、

「でも、きつと無理」

と、言つて、ため息をつくように小さく口元で綻ばせた。

どうして？わたしが尋ねるよりも先に、彼女の方がさきに口を開いた。

「お父さんが反対なの。わたしがピアノをやるの」

と、彼女は短く答えた。

「もう二年くらい、ピアノを習わしてもらえてないの」

「だけど、可奈ちゃんのお母さんはピアノの先生なんですよ？」

わたしが疑問に思つて尋ねると、彼女は少し顔を伏せて、弱く首を振った。そしてそれから、彼女は物思いに沈むように眼差しを伏せると、ピアノの鍵盤の上あたりを見つめたまま黙っていた。

「……二年前に、お母さん、家を出て言っちゃったの」

と、しばらくの沈黙のあとで、彼女は口を開くと唐突に言った。

わたしは彼女の口からでてきた科白があまりにも意外だったので、咄嗟になんて言ったらいいのかわからなかった。だから黙っていた。わたしが黙っていると、彼女は続けて話した。

「お母さん、お父さんのことをおいて、他のひとのところに行っちゃったの」

彼女は顔を俯けたまま、静かな声で話した。

「そうなんだ」

と、わたしは相槌を打った。ほんとうはもつと違う、何か彼女を慰めるか、励ますような言葉が口にしなかったのだが、そのときわたしが口にすることができた言葉はやつとそれだけだった。

「それでお父さん、お母さんのこと、すごく怒って。お母さんのピアノとか全部、お母さんのもの捨てちゃったの。・・・わたしがピアノを習うのも駄目だった」

「それでさっきピアノを習わしてもらえてないって言ってたんだ」
わたしはやつと彼女の言葉が理解できたような気がした。それからわたしは想像してみた。自分の母親が自分とお父さんのことを捨ててほかの男のひとのところへ行ってしまうということを。もし、そうなったら、きっとわたしはすごく傷ついただろうと思った。そして、自分のことを捨てていった母親のことを憎んだかもしれないと思った。

「だから」

と、彼女は話続けた。

「お父さんが、わたしにピアノを習っちゃだめだっていう気持ちも

すぐわかるの」
と、彼女は言った。

「・・・お父さん、お母さんのこと、すごく好きだったみたいだから、だから、余計に、お母さんのことが許せないのよね。わたしが、お母さんが好きだったものを、続けるのが許せないの。お父さんはたぶん自分のことを裏切ったお母さんの全てを否定したいんだと思う・・・」

「そっか」

と、わたしは相槌だけを打った。そしてなんとなく、彼女の弾くピアノ音が悲しげに感じられる理由が、わかったような気がした。

「・・・かわいそうなお父さん」

と、彼女は小さな声で付け加えるように言った。

それから、しばらくの沈黙があった。その日は夏にしては肌寒い日で、教室の窓からは霧のように輪郭が曖昧な曇り空が見えていた。

「可奈ちゃん」

と、わたしはいくらかの沈黙のあとでちょっと迷ってから尋ねてみた。

「やっぱりお母さんのことが許せない？」

わたしの問に、彼女はそれまで俯いていた顔をあげてわたしの顔を見た。彼女の顔には表情らしい表情は浮かんていなかった。強いていえば、精気のない、疲れたような表情を浮かべていた。それから、彼女はわたしの顔に向けていた視線を、窓の外に向けると、
「どうだろう」

と、考え込むような顔つきをして答えた。

「もう、お母さんには会えないんだと思うと、すごく哀しくなるときもあるし、今の現実を受け入れたくないような気持ちになることもあるけど・・・」

わたしは彼女の言葉の続きを待つて黙っていた。

彼女は窓の外に向けていた視線をわたしの顔に戻した。

「でも、お母さんのことが憎いとか、許せないとか、そういうことはあんまり思わないかな。ただ、ぼんやりとした喪失感みたいなものがあるだけ」

彼女はそう言うと、視線をピアノの鍵盤の上に落とした。まるでそこにさっき自分が口にした言葉が落ちていて、その言葉の意味と、今の自分の気持ちを見比べるみたいに。

「お母さんはすごく優しくかったの」

と、彼女は幾ばくかの沈黙のあとで言った。

「わたしのこと大事にしてくれてた。わたしに優しくピアノを教えしてくれたし、何か哀しいことがあると抱きしめてくれたし・・・だから、そのお母さんがいなくなつて寂しいとは思うけど、嫌いとか許せないとか、そんなふうに思うことはできない、のかな」

彼女はお母さんのことを思い出しながら話すようにゆっくりとした口調で言った。

「だけど、可奈ちゃんのお母さんは可奈ちゃんのことを置いていっちゃったんだよ？」

わたしは彼女の気持ちがいまひとつ理解できなくて、残酷かもしれない質問をした。なぜなら、普通であれば自分のことを捨てていった母親を憎みはしないまでも、抗議したくなるのが当然の感情だ

ろうとわたしは思ったからだ。

彼女はわたしの間に、伏せていた顔をあげると、あまり感情のこもらない瞳でわたしの顔をじっと見つめた。それから、また眼差しを鍵盤の上に落とすと、

「きつと仕方がなかったんだと思う」
と、ポツリと言った。

「お母さんがわたしたちのことを置いていったのは、べつにわたしたちのことを愛してなかったとかそういうことじゃなくて・・・ただ、あまりにもお母さんと一緒に出て行ったひとのことを好きになりすぎたんだと思う・・・きつとお母さんもすごく悩んで悩んで、それで仕方なくだした結論だと思うから・・・だから、仕方がないと思う」

彼女は眼差しを伏せたまま、淡い青色の色素がついているような静かな声でそう話した。

「可奈ちゃんは優しいんだね」
と、わたしは彼女の横顔に視線を向けて小さな声で言った。

佐藤可奈の思い出 2

彼女のことを思い出すと、わたしが最初に思い浮かべるのは、彼女が好んでよく弾いていたヴェートヴェンのピアノソナタだ。何か失われてしまったものを忍んでいるような、思い出しているような、それでいて、とても優しい曲。色彩のイメージで言うと、淡いブルーと淡いグリーン。その光が交錯し合いながら揺れているような感じ。

彼女はその曲を、彼女のお母さんが好きだった曲だと話した。雨の日の日曜日なんかにお母さんがよく弾いていた曲だ、と、彼女はわたしに話してくれた。そしてそのお母さんが弾いているピアノ曲を聞いているのがとても好きだった、と、彼女は懐かしそうな、寂しそうな表情でわたしに語った。

わたし自身も彼女の弾くそのピアノ曲が好きで、よく頼んで彼女に弾いてもらっていた。わたしが彼女の演奏に耳を傾けながらいつもイメージしたのは、深い湖の底に沈んでいく、やわらかく、温かそうな、微かに黄金色の色素を含んだ透明な太陽の光だった。

深い湖の底には一本の白い花が咲いていて、彼女はその深い湖の底で、冷たい水に揺られながら、普段はあまり光の届かない薄闇のなかで、彼女にとって永遠と思える距離にある湖面を憧れるように見つめている。

彼女のいる湖底は一日の大半が半透明の青色の色素の闇に包まれ

ている。でも、一日のうちのごくわずかな時間のあいだだけ、明るい太陽の光が彼女のもとにも届くことがある。

太陽の光は水中のなかを文字通り闇を切り裂くように抜け、ゆっくりとではあるが、でも、確実に、彼女のもとへ舞い降りていく。彼女はその光に触れようと手を伸ばす。でも、彼女の伸ばした手の指先があともう少しで光に触れようとした瞬間、光は何かにはじかれるように散り散りになって消えてしまう。

彼女の演奏するピアノ曲はとても暖かくて純粹でありながら、同時に、どうしようもなく深い闇を抱え込んでいるようにも感じられた。

それは喧嘩というよりも、わたしが一方的に癪癪を起した感じだった。

確かあれは、彼女と知り合って一年程が経った、夏休みに入る直前くらいのことだった。

その日は日曜日で、朝から静かな雨が降っていた。

ほんとうはその日、外で遊ぶ予定になっていたのだが、雨が降っているので急遽予定を変更して、わたしの家で遊ぶことになったのだ。

その日はいつもわたしの部屋で遊ぶときそうしていたように、部屋でおしゃべりをしたり、漫画を読んだり、テレビゲームをしたり

して時間を過ごした。

可奈ちゃんがわたしが作ったプラモデルに興味を示したのは、わたしがテレビゲームに夢中になっているときだった。

わたしにはふたつ年上の兄がいて、その影響もあってわたしは当時女の子が好むような人形やぬいぐるみよりも、男の子みたいに、プラモデルやモデルガンなどに夢中になっていた。

「美樹ちゃん、これなに？」

と、わたしがゲームをしていると、背後から彼女の声が聞こえた。振り返ってみると、彼女はいい最近わたしが苦労して完成させたばかりのプラモデルを手にとって珍しそうに眺めていた。

「あ、それ触らないで！」

と、彼女が自分のプラモデルを触っているのを見た瞬間、わたしは反射的に咎めるような口調で言ってしまった。わたしはそのプラモデルがお気に入りだったのだ。彼女に触られて、壊されてしまったるのが心配だった。だから、つい、きつい言い方をしてしまった。

きつと彼女はわたしのリアクションにびっくりしてしまったのだろう。えっと、言っ、わたしの顔を見た瞬間、手にしていたそのプラモデルを床の上に落としてしまった。プラモデルは床に落ちた衝撃で、手と、顔の部分がもげてしまった。

「だから、触らないで言っただじゃん！」

と、わたしはその光景を見た瞬間、怒鳴っていた。わたしはそれまで座っていたフローリングの床の上から立ち上がると、歩いていて、床の上に落ちているプラモデルを拾い上げた。そして力任せ

に、彼女の二の腕あたりを叩いた。

「・・・ごめん」

と、彼女は怯えたような表情でわたしの顔を見ると謝った。

「帰って」

と、わたしは怒った声で言った。

「美樹ちゃん、ほんとにごめん」

と、彼女は目に涙を浮かべながら申し訳なさそうに謝った。でも、その声をわたしは無視した。

「もう帰って！」

と、わたしは叫ぶように言った。

彼女は何か言いたそうな表情でわたしの顔を一瞥したけれど、結局何も言わずにそのままわたしの部屋から出て行った。部屋から出て行く彼女の背中を見つめながら、わたしは自分の心のなかに苦い味がするような感情がゆっくりと広がっていくのを感じていた。

次の日、学校に登校すると、彼女は真っ先にわたしに謝ってきた。でも、そのときわたしは何故か意地になっていて、彼女の言葉を素直に受け入れることができなかった。意地悪く、彼女のことを無視してしまった。

彼女はわたしが無視すると、傷ついた、寂しそうな表情を浮かべて、自分の席へと戻っていった。

ほんとはそのとき、わたしはすぐにも彼女と仲直りしたい気持ちで一杯だったのだが、でも、どうしてか、そうすることができなかった。彼女はわざとわたしのプラモデルを壊したわけじゃないのに、しかもなおかつ、謝ってくれているというのに、わたしは自分でも理解できないほど頑なになってしまっていた。

その日以来、わたしたちは口をきかなくなった。以前は毎日のように一緒に帰っていたのに、べつべつに帰るようになった。

そして、彼女と口をきかないまま、夏休みを迎えてしまった。

郵便受けに、彼女からの手紙が入っていたのは、夏休みも半ばを過ぎたある日のことだった。

わたしたちは夏休みに入ってから一度も会っていなかったし、口もきいていなかった。何度かわたしは彼女の家電話をかけて、この前のことを謝ろうかとも思ったのだが、でも、勇気がなくてできなかった。

手紙を開封してみると、まず彼女はこの前プラモデルを壊してしまって、申し訳なかった、と、書いていた。ほんとうにごめん、と。それから、彼女はこう手紙の文章を続けていた。

突然ですが、わたしは新学期がはじまる前に、また転校することになってしまいました。

美樹ちゃんにはほんとうに感謝しています。美樹ちゃんとはじめてちゃんと言葉を交わした、あの日の放課後のことを、わたしは今でも印象的に覚えています。

あるとき、わたしは美樹ちゃんに親しく声をかけてもらえて、ほんとうに嬉しかった。これまでわたしなんかと親しくしてくれてありがとう。

わたしは転校続きで、今まであまりちゃんとした友達がいたことがなかったから、この学校にきて、美樹ちゃんという友達ができたことはほんとうに嬉しかった。感謝しても感謝しつくせない限りです。

わたしのせいでこんふうにちゃんとしたお別れの挨拶もできないまま離れ離れになってしまうのはとても残念だけど、わたしは新しい転校先でもいつも美樹ちゃんのことを想っています。美樹ちゃんのことを応援しています。

そして少しでもいいから、わたしが転校しても、美樹ちゃんがわたしのことを思い出してくれたら嬉しいなと思います。

最後になってしまったけど、この前のお詫びに、わたしの宝物を美樹ちゃんにあげます。これはわたしがお母さんにもらった大切な宝物です。きつと美樹ちゃんだったら似合うんじゃないかな。

わたしが転校しても元気でね。バイバイ。

彼女が出紙と一緒に同封してくれていたのは、蝶々の形をした、きれいな髪留めだった。

わたし彼女の手紙は読み終えると、涙がとまらなかった。どうしてもあのとき、彼女のことを責めたりなんてしまったのだらうと激しく後悔した。彼女は何も悪くないのに。そして彼女が謝ってくれたときに、どうしてその言葉を素直に受け入れなかったんだらうと悔しかった。

わたしは手紙を読み終えると、彼女の家に向かったけれど、彼女はもう既に引越してしまっただとらしく、彼女の住んでいた家には誰もいなかった。ただ入居者募集の張り紙がしてあるだけだった。

彼女の手紙には彼女の新しい連絡先も住所も何も書かれていなかった。たぶん、彼女は手紙を書いたあと、自分でわたしの家の郵便ポストに投函したのだらう。そしてもしかしたら、そのまま町をあとにしたのかもしれない。わたしはそんな彼女の姿が目に見えないうで、哀しかった。

新学期が始まると、わたしは担任の先生に彼女の連絡先について尋ねてみたけれど、担任の先生も彼女がどこか北海道の方に引越したらしいということを知っているだけで、彼女の新しい住所についてまでは知らないようだった。

もしかしたら、もっと他にも手をつくせば、彼女の新しい住所について知る方法もあったのかもしれないが、当時まだ子供だったわたしにそこまで思いつくことはできなかった。

そしてそのようにして、わたしは佐藤可奈という大切な友人を失ってしまったのだった。

彼女は今頃どこでどうしているのだろうか、と、わたしは思う。彼女はあれからまた新たに大好きなピアノを習うことができたのだろうか。そして、お母さんと再会することはできたのだろうか。

彼女が手紙と一緒に同封してくれた蝶々の髪留めは今でも大切に持っている。いつか、もし、どこかで彼女と再会できたそのときは、あの髪留めを彼女に返そうと思う。そして、あのとき言えなかった、ごめんの言葉を言なくちゃな、と思う。

耳を澄ますと、水色の色素を含んだ、彼女の優しくも哀しいピアノの音色が、どこからともなく聞こえてくるような気がした。

佐藤可奈との会話と昔の話

「もう、朝になっちゃったんですね」

と、となりで声がしたのは、わたしが車を運転しながら小学校の頃の同級生のことを思い出しているときだった。

ちらりとなり視線を走らせてみると、佐藤可奈はまだ眠り足りないとも言つのように大きな欠伸をしていた。

「やっと起きたんだね」

と、わたしは小さく笑つて言った。

「ごめんなさい」

と、佐藤可奈は苦笑すると、

「なんだか車の振動が心地よくて。安心するっていうか」

「あー、なんかそういう感じわかるかも」

わたしは軽く笑つて相槌を打った。

「子供の頃、わたしも両親が運転する車のなかでよく眠ったもんなあ」

と、わたしは子供の頃、家族で車で出かけたときのことを懐かしく思い出した。

「今どのへんですか？」

と、佐藤可奈は車の外に視線を向けると、不思議そうに言った。

「あともう少しで京都に入るよ」

「ほんとですか！」

佐藤可奈は故郷が近づいてきたのが嬉しいのか、はしゃいだ声で言った。

「あんたが眠ってるあいだにこっちはがむしやりに車飛ばしてたからね」

と、わたしが冗談めかして皮肉を言っていると、佐藤可奈は窓の外に向けていた視線をわたしの方に戻して、

「すみません」

と、恐縮したような表情で謝った。

わたしは彼女のそんな様子が可笑しくて、噴出すようにして笑った。

京都に入る前に、お腹が空いたので、高速のサービスエリアで朝食を取ろうということになった。

サービスエリアの駐車場に車を止めると、わたしたちはそのサービスエリアにあったファミリーレストランに入った。

店内は夏休みのせいか、家族連れらしいひとたちで、まだ朝の早い時間帯だというのに、比較的混雑していた。

わたしたちはウェイトレスの女の子に窓際に席に通されて向かい合わせに腰かけた。わたしも佐藤可奈もモーニングセットを注文した。コーヒードパンとベーコンエッグとサラダ。注文したモーニングセットはすぐに運ばれてきた。

「この値段でこのボリュームはお得だね」

と、わたしはロールパンを千切って口のなかに放り込みながら言っ

た。

「確かに」

と、佐藤可奈はコーヒードパンを口元に運びながらわたしの科白に微笑して相槌を打った。

「わたし、貧乏性なのか、昔からファミリレストランが好きなのよね。落ち着くっていうか、安心するっていうかね・・・フリーターやってた頃とか、相方と打ち合わせするのとかによく使ったしね」

「相方？」

と、佐藤可奈はわたしの科白に不思議そうな顔をした。

「ああ、まだ話してなかったけ？」

と、わたしは苦笑すると、彼女に自分の経歴を簡単に話して聞かせた。わたしが昔ミュージシャンを目指していたことがあったことでも、結局、音楽では結果が出せなかったこと。田畑という一緒に音楽をやっていた男のこと。

「そっか。大塚さんも色々あったんですね」

と、佐藤可奈はわたしの話を聞き終えると、感慨深そうに頷いた。

「わたしも来年で三十だからね、まあ、色々あったよ」

わたしは自嘲気味に小さく笑って答えた。

「って、大塚さんって来年で三十歳なんですか!？」

と、佐藤可奈はわたしの年齢を聞いてびっくりしたように言った。

「そうよ。もしかして、もっとおばさんだと思ってた？」

わたしが笑ってからかうように尋ねると、彼女は首を大きく左右に振って、

「逆です。もっと若いかと思ってた。せいぜいわたしよりも四つ上くらいかなあって」

わたしは彼女の科白に微笑すると、

「ありがとう。お世辞でもそう言ってもらえて嬉しいよ」

と、答えた。そして、言いながら、若く見られて嬉しいなんて、

自分も年を取ったなあと心のなかで苦笑いした。

「大塚さんはもう音楽はやらないんですか？」

と、佐藤可奈は興味津々といった様子で尋ねてきた。

わたしはコーヒーを一口啜ると、苦笑して軽く首を振った。

「さっきも言ったと思うけど、わたし、来年で三十歳よ。もう夢を追うような年齢でもないでしょ」

わたしは明るい口調を装って言ったけれど、内心、ちょっと惨めな気持ちにもなった。頭ではもう自分がかつてほど若くないことも、夢を無邪気に追いかけられるような年齢でないことも十分わかっているのだが、でも、そのことを認めたくないという気持ちは、どう

しようもなくあった。

「だけど、そういうのって」

と、佐藤可奈はコーヒーマグの入ったマグカップのなかに視線を落としながら言った。

「あんまり関係ないと思うんだけどなあ」

と、彼女は納得できないというように言った。

「こういう考え方って幼いのもかもしれないけど、ほんとうにやりたいことだったら、たとえ何歳になっても続けられればいいんじゃないかって思うけど」

「そうね」

と、わたしは顔を俯けるようにしている彼女の顔を優しく見つめて言った。

「だから、わたしは自分のやりたいことを貫く勇氣ない、だめな人間なのよ」

わたしは微笑んで言った。

「わたしが言いたいのはそうことじゃなくて・・・」

佐藤可奈はそれまで伏せていた眼差しをあげてわたしの顔を見ると、抗議するように口を開いた。でも、口を開いたのはいいものの、彼女はそれ以上どう自分の気持ちを説明したらいいものかわからなかったらしく、開いていた口を再び閉じた。そして何かを流しこむにコーヒーマグを飲んだ。

いくらかの沈黙があった。わたしも彼女も黙って料理を口に運んだ。まだ夜が明けたばかりの初々しい朝の光が窓から静かに差し込んできていて、テーブルのうえには光の水たまりができていた。

「わたし、まだ二十一とかだけど」

佐藤可奈が口を開いたのは、それからしばらく経ってからのことだった。わたしは料理を口に運ぶのを止めると、彼女の顔に視線を向けた。佐藤可奈はちらりとわたしの顔に視線を向けると、すぐに逃げるように目線を落とした。

「一応、大塚さんが言ってることもわかる気がするんです。確かに、現実って厳しいものだし、信じて努力すればそれが報われるような甘い世界じゃないことも、一応、常識としては知ってるつもりです。でも、それじゃ、なんだか虚しいなって思っ。みんながこんなものかって妥協して、何かを諦めていくしかないのが現実なんだとしたら、すごく詰まらないじゃないですか？彼氏のこともあるって、そういうのがいまひとつ納得できないっていうか、わかったような顔をして生きていきたくないっていうか」

彼女は自分の思っていることを少しずつ言葉に置き換えていくように、小さな声で、ゆっくりとそう話した。

わたしは彼女の言葉に頷いた。

「佐藤さんの言いたいことはよくわかるよ」

と、わたしは言った。

「佐藤さんの言いたいことはよくわかるし、間違っ。てないと思う。だから、佐藤さんはわたしの分までその信念にしたがって生きてや。りたいことをやって」

わたしは微笑みかけて言った。

佐藤可奈はそう言ったわたしの顔をいくらか上目遣いに見ると、
「それはつまり、もう、大塚さんは音楽をやるつもりはないってこと？」

と、わたしが口にしたことが受け入れ難いというように少し小さな声で言った。

「そうだね」

と、わたしは吐息をついてから、苦笑するように口元を綻ばせた。
「わたしは・・・何かを信じて真っ直ぐに進んでいくには、いささか疲れちゃったのよ。色んな大切なひとがわたしの側がいなくなっちゃったしね」

佐藤可奈はそう言ったわたしの顔を、何か哀しい光景でも眺めるような顔つきで眺めていた。

佐藤可奈との話と別れ

「色々ありがとうございました」

佐藤可奈はわたしが駅のロータリーで車を止めると、そう改まった口調で言って頭を下げた。

「そんなかしこまらなくていいよ」

わたしは照れ臭くなって笑って言った。

佐藤可奈が車を下ろして欲しいと言ったのは、まだ京都駅からだいぶ離れた、寂れた感じのする郊外の駅だった。駅前だというのに繁華街らしものは何もなく、店といえば、通りを挟んだ向かい側にコンビニが一軒立っているのが見えるだけだった。

「でも、ここまで来たんだから、ついでだし、もっと京都駅近くまでいってもいいんだよ」

と、わたしが心配して提案すると、彼女は首を振って、

「いいんです。ここで」

と、短く答えた。

「わたしの実家って、京都の中心からだいぶ離れたところにあるんですよ。だから、むしろここから電車に乗っていった方が近いんです」

「なるほどね」

と、わたしは納得して頷いた。

少しの沈黙があった。わたしも佐藤可奈も黙っていた。これから彼女がいなくなってしまうのだと思うと、比較的長い時間を一緒に過ごしたせいかな、名残惜しい気持ちになった。

「大塚さんともここで別れなんですね」

どうやら佐藤可奈もわたしと同じことを感じてくれていたようで、わたしの顔を見ると寂しそうに微笑んで言った。

わたしは微笑して頷いた。

「わたしに大塚さんみたいなお姉ちゃんがいたら良かったんだけどな」

佐藤可奈は明るい笑顔で冗談めかして言った。

わたしは苦笑して首を振った。

「だめだよ。わたしみたいな品のないお姉ちゃんなんて」

「確かに品はないかも」

佐藤可奈はわたしの科白に悪戯ほく笑って答えた。

いまなんて言った？と、わたしが笑って冗談で返すと、佐藤可奈は可笑しそうにクスクス笑った。

そしてそれから、

「そういえば、まだ聞いてなかったけど、大塚さんってこれから何をしにいくんですか？」

佐藤可奈はわたしの方を振り向くと、ふと思いついた様子で尋ねて来た。

「ああ、まだ話してなかったけ？」

わたしは彼女の問に、これから友達に会いに行く予定なのだと告げた。昔、アルバイトをしているときに知り合った、小説を書いている友達のこと。

「へー。小説家か」

と、佐藤可奈はわたしの話に感心したように頷いた。

「すごいですね。自分で物語が書けるなんて。わたしなんて想像力ゼロだから絶対無理ですよ」

彼女はそう言ってから、愉快そうに少し笑った。

「わたしも物語を書くなんて無理だなあ」

と、わたしも軽く笑って正直な実感を述べた。

「そのひと、どんな話を書いているんですか？」

と、佐藤可奈は興味を惹かれたように続けて尋ねてきた。

「どんな話かあ」

わたしは呟いてから、引越する直前に読んだ沢田の小説を思い起こした。

「一口で説明するのは難しいけど、静かで、優しい感じのする小説だよ。冷たく、澄んだ、穏やかな風みたいなの」

「へー。面白そう」

佐藤可奈は明るく表情を輝かせて言った。

「わたしも読んでみたいかも。その小説」

「今度、コピーして送ってあげようか？ 沢田もできればたくさんのひとに読んでもらいたいだろうし」

「いいんですか！？」

彼女はわたしの提案にほんとうに嬉しそうに弾んだ声を出した。

わたしは微笑して頷いてから、彼女に住所を教えてもらい、それを携帯電話のメモ帳に記録した。

「だけど、みんなそれぞれ目標を持って頑張ってるんですね」

と、佐藤可奈はそれまでわたしの方に向けていた顔を正面に戻すと、いくらか眼差しを伏せるようにして小さな声で言った。

「わたしの場合は過去形だけだね」
と、わたしは微笑して訂正した。

わたしの科白に、佐藤可奈は黙ったままだった。そしてそれから、彼女は何かに思いを巡らせるように俯いたままだったけれど、

「わたし、何もないんですよね」

と、やがて口を開くと静かな声で言った。

「何もない？」

と、わたしが彼女の横顔に視線を向けて反芻すると、彼女は短く頷いてから、

「大塚さんたちみたいに、わたし、人生においてこれがやりたいってこういう具体的な目標って何もないんですよね」

と、呟くような声で言った。

「でも、それはそれでべつにいいんじゃない？」

わたしは彼女を慰めるでもなく微笑みかけて言った。

「わたしたちみたいにやりたいってことがあると、かえってそれが執着に変わって惨めな思いをしたりすることだってあるからね」

佐藤可奈はわたしが口にした言葉の意味を吟味するように少しのあいだ黙っていたけれど、やがてわたしの方を振り向くと、

「でも、たとえそうだとしても、わたし、何か欲しいんですよね」

と、真剣な表情で言った。

「何か明確な目標みたいなもの。結果としてそれで苦しむことになったとしても、自分がこのために生きてるって思えるような、そういうものが欲しいなって思う」

佐藤可奈はそこまで話すと、

「ごめんなさい。突然熱く語ったりして。こういう考えた方ってたぶん幼いですよね」

と、恥ずかしそうに小さく微笑して謝った。

わたしは微笑んでそんなことないよと答えた。

「とにかく」

と、佐藤可奈はわたしの方に向けていた視線を正面に戻すと言葉を続けた。

「わたし、大塚さんたちが羨ましいなって思っただけです。具体的なやりたいことがあって。だから、わたしもこれから探してみようかなって思っただけです。やりたいこと。自分が夢中になれること」

「そっか」

と、わたしは彼女のことを暖かく見守るように見つめながら相槌を打った。

「だから」

と、佐藤可奈はまたわたしの方を振り向くと、更に言葉を継いだ。「大塚さんも音楽やめないうでくださいよ。趣味でもいいから続けてください」

と、優しい笑顔で言った。

「そっだね」

と、わたしは少し迷ってから曖昧に微笑んだ。

沢田の故郷まであともう少しで辿り着けそうだった。

時刻は午前十一時を回ろうとしている。いまわたしが運転している車は海岸線の道を走っていて、窓からは濃い青色をした海を見ることができた。もうすぐ正午を向かえようとする日差しは強く、海面はその明るい光は受けて眩しく乱反射していた。まさに夏の海といった感じする。

遠くの方には巨大な入道雲が見え、海の上にはヨットらしき船の姿がいくつか見えた。わたしはそんな夏らしい光景を軽く目を細めるようにして見つめた。そしてわたしはとなりを振り向いて、「夏らしい景色だね」と、感想を述べようとして、開きかけていた口を閉ざした。もうとなりの助手席には誰も座っていないのだ。

佐藤可奈とは駅の改札の前で別れた。彼女はべつに駅まで見送ってくれなくてもいいと言ったのだが、わたしが無理に駅の改札までついていったのだ。車の前で彼女とあっさりと別れてしまうのは、なんだか名残惜しかった。

「そういえば、昨日、車のなかで喧嘩した彼氏とはどうするの？」
彼女が自働発券機で切符を買ったあと、わたしはなんとなく気になって尋ねてみた。

「このまま別れちゃうの？」

「どうしようかな」

彼女はわたしの間に、表情を曇らせて呟くように言った。それから、彼女は鞆のなかからケータイ電話を取り出して、恋人から連絡が来ていないかどうかを確かめた。

「彼氏から、メールとか、電話来てないの？」

と、わたしが尋ねてみると、彼女は軽くふて腐れたように唇を尖らせて首を振った。

「アイツ、わたしのことなんてどうでもいいんですよ」

「そんなことないと思うけどな」

と、わたしは軽く笑って言った。

「きつと佐藤さんがまだ怒ってると思って連絡しづらいんだよ」

彼女はわたしの言葉に、不審そうにもう一度ケータイ電話の画面に視線を落とした。

「ほんとはすごく気にしてると思うけどな。佐藤さんが自分と別れたあとどうしたんだろうって」

「そんなことないですよ。アイツはきつとわたしなんてどうなたっ
ていいと思ってるんです」

佐藤可奈は怒ったような顔で言った。

「それにもし、心配してるなら、喧嘩別れたあと、すぐに電話が
かってくるだろうし」

「でも、電話したけど、電波がなくて電話がかからなかったとか。
電話しようとしたけど、ケータイの充電が切れちゃってたとかかも」
わたしは彼女の顔を見つめて言ってみた。

「それですぐにあなたのことを向かえに別れた高速に向かったんだ

けど、そのときにはあなたはわたしと一緒に移動したあとであなたには会えなかったのかもしれないじゃない？」

佐藤可奈はわたしの言ったことについて検討するように黙っていた。

「電話してみたら？」

わたしは黙っている彼女に向かってなだめるように言った。

「まだ好きなんてしょ？ 彼氏のこと」

彼女はわたしの科白に、どこか思いつめたよう表情を浮かべてしばらくのあいだ黙っていたけれど、やがて俯けていた顔をあげてわたしの顔を見ると、

「そうですね」

と、何かを認めるように、仕方がないというふうに口元を綻ばせて頷いた。

「家に帰ったら電話してみます。それで素直に謝ります。わがまま言ってごめんって」

「そうした方がいいよ」

わたしは微笑んで言った。

彼女は黙って頷いた。

佐藤可奈は駅の改札を抜けると、わたしの方を振り向いた。そしてわたしの顔を見ると、

「色々ありがとうございます」

と、軽く頭を下げて改まって口調で言った。

「車のなかで眠ってばかりでごめんなさい」

「あんたの寝顔、可愛かったよ」

わたしが微笑してからかうと、彼女は顔を赤らめて首を振った。

「元気でね」

と、わたしは微笑んで言った。

「大塚さんも」

彼女がそう言ったところで、唐突にケータイ電話の着信音が鳴った。一瞬、自分のケータイ電話が鳴っているのかと思ったが、どうやら鳴っているのは彼女のケータイ電話のようだった。

「もしかして彼氏から？」

わたしが笑って冷やかすと、彼女は恥ずかしそうに微笑して頷いた。それから、彼女は着信音が鳴り続けるケータイ電話に視線を落としてから、またわたしの顔に視線を向けた。

「それじゃあね」

わたしは彼女に向かって片手をあげると、方向転換をして歩き出した。

そして少し進んだところで後ろを振り返ってみると、ケータイ電話を耳にあてて嬉しそうに話している彼女の顔が見えた。きつと仲直りできたのだろう。わたしはケータイ電話を片手に明るい表情で話し続ける彼女の顔を見つめながら、心のなかで良かったねと微笑むようにそつと思った。

福島さんの思い出

気持ちの良い天気なので、海沿いの道に車を止めると、防波堤のうえに上がり、そこに座って海を眺めながら昼食を取ることにした。海が目の前にあるかせいか、吹きつける風は冷たく澄んでいて、照りつける日差しは強いものの、それほど暑さは感じなかった。

昼食のメニューは途中のコンビニで買った弁当とお茶だ。空腹せいか、すぐに弁当はなくなってしまう、あとは海を眺めながらゆっくりとお茶を飲んだ。ちょっとしたピクニックだ。

ピクニック。そういえばもうだいぶ前のことになるが、わたしがまだアルバイトをしていた頃、同じアルバイト先のひととこんなふうに海を眺めながら弁当を食べたことがある。あれはわたしがまだ二十三とか、四の頃で、一緒に弁当は食べたひとは、わたしよりも四つほど年上の女の人だった。

彼女の名前は福島真由美といった。彼女は美大の油絵を卒業したあと、留学費用をためるためにアルバイトをしていた。フランスに留学するつもりなのだ、と、あるとき彼女はわたしに話してくれた。

今となってはどういう経緯で彼女が絵を描くのにながたがついて

いくことになったのかよく思い出せないのだが、わたしたちは朝早い時間帯の電車に乗って千葉の海に出かけた。

わたしが彼女に連れられていったのは、遊泳禁止で岩だらけの、人影のない、しんとした浜辺だった。波打ち際には敵意をむき出しにしたような荒々しい波が激しく打ち付けていた。

彼女は砂浜の上に座ると、スケッチブックにもくもくと絵を描き始めた。わたしは彼女の隣にあぐらをかいて座ると、彼女に道具をかしてもらい、スケッチのまねごとのようなことをして時間を過ごした。

しばらくしてからふと彼女がどんな絵を描いているのか気になってとなりを覗き見てみると、彼女のスケッチブックに描かれていたのは、到底海とは思えないような絵だった。素人のわたしにはそれは海というよりも、巨大な壁の上をミミズが動きまわっている絵のように見えた。

きつとわたしが唖然とした表情を浮かべているのが視界の隅に入っただろう、彼女はちらりとわたしの顔に視線を走らせると、可笑しそうにクスクス笑った。

「とても海の絵には見えない？」

彼女は振り向いてわたしの顔を見ると、口元に悪戯っぽい微笑を浮かべて尋ねた。

「いや、まあ、海に言えないというか、なんか独創的な感じだなあ
と思うて」

正直な感想を述べるのは失礼かと思ったわたしは穏当な表現になおして言った。

すると、彼女は愉快そうに大きく口を開けて笑って、それから、

「正直に言っているのよ」

と、楽しそうに言った。

「実際のところ、わたしもこれは一目見た感じじゃとても海には見えなくなって思うもの」

彼女は笑って続けて言った。

それから、彼女が説明してくれたところによると、彼女が描いている海の絵はいま目の前に広がっている海をそのまま描いたわけでないのだということだった。自分の視覚のなかに入ってくる海を一度自分のなかでバラバラに分解して、それからそこに自分なりのイメージや、解釈を加えて、再構成したものだという話だった。

彼女の言っていることは素人のわたしには難しかったが、彼女の描いている絵がただ観たままの海を描いているわけではないのだということとはなんとか理解できた。

「へー。すごいですね。さすがは美大生」

わたしは感心して言った。

「まあね」

と、彼女はおどけてそう答えると、口元で小さく笑った。それから、彼女はまた顔を俯けると、真剣な表情で絵の続きに取りかかった。

「福島さんって」

わたしはしばらくしてから声をかけた。

「なに？」

福島さんはスケッチブックから顔を上げると、不思議そうにわたしの顔を見た。

「いつぐらいから絵に興味を持ちはじめたんですか？」

彼女は私の問いに、顎に手をあてて何かを思い出そうとするように視線をやや斜め上に上げた。それから、彼女は五秒間くらい考えていたけれど、

「昔からわりと絵を描くのは得意な方だったけど、でも、本格的に絵をちゃんとやろうと思いはじめたのは高校のときね」

と、福島さんは口を開くと言った。

「何か切っ掛けとかあったんですか？」

と、わたしは尋ねてみた。

「切っ掛け？」

と、福島さんはわたしの科白を復唱した。

「そう。これから絵を描こうって決意するような」

福島さんはわたしの言葉に可笑しそうに微笑すると、

「決意って、そんな大袈裟なものじゃないけど」

と、言って、逡巡するようにわずかに間をあけたあと、

「実を言うと、好きなひとができたのよ」

と、福島さんはわたしの顔を見て微笑んで言った。

「高校のときに」

福島さんはそう言うってから照れ臭そうに口元で笑った。

「今となって懐かしいわね」

そう言った福島さんの口調は明るかったが、気のせいかな、その瞳には何か失われてしまったものを忍ぶような淡い光があるように思えた。

「良かったら聞かせてくださいよ」

と、わたしは言った。

福島さんが好きになったその男のひとは、同じ高校のひとつ年上の先輩だった。福島さんは高校に入学すると、友達に誘われて美術部に入ったのだが、それは友達に誘われて仕方なく入ったという感じで、最初の頃はそれほど熱心に活動するつもりはなかった。

友達との付き合いで、ただ席をいれておくだけのつもりだった。

ところが、福島さんはその入った美術部で思いがけず、先輩と知り合うことになった。福島さんはその先輩に会うために毎日放課後美術部の活動に参加するようになり、そうしているうちに、自分でも熱心に絵を描くようになっていったのだ、と、福島さんはわたしに語った。

「その福島さんが好きになったひとつでどんな感じのひとだったん

ですか？」

わたしは気になったので尋ねてみた。

「カッコイイひとですか？」

「そりゃ、まあね」

福島さんはわたしの問に、苦笑するように笑って答えた。

「わたしって結構面食いだと思うし」

それから、わたしが芸能人だと誰に似ているのかと尋ねると、彼女は最近人気が出てきたばかりの俳優の名前をあげた。その俳優はすらりと背の高い、女のひとのように綺麗な顔立ちの、どこことなく影がある感じのする俳優だった。

わたしもその俳優のことはカッコイイなと思っていたので、

「そんなにカッコイイひとが学校にいたんですか！？」

と、驚いて、感心して言った。

「って言っても、これはあくまでわたしの主観。実際にはそこまでじゃないと思うけど」

福島さんはわたしの感激ぶりに笑って訂正した。

「でも、それだけカッコイイひとだと、学校でも相当人気があったんじゃないですか？」

「そうね」

わたしの問に、福島さんは目元で笑って頷いた。

「だから、最初の頃は敬遠してたの。わたしと一緒に入った友達の女の子も先輩に憧れてみたいだし、だから、みんなと同じなんてバカみたいと思って」

「もちろん、カッコイイひとではあるから、気にはなってたんだけどね」

福島さんはそう付け加えるように言ってから、微苦笑した。

「そういう感じはわかりますね」
と、わたしは笑って同意した。

「だけど、あるとき、はじめて、先輩の描いてる絵を観てから、そういう敬遠してた気持ちが吹っ飛んじゃったの。その、なんていうのかな、先輩の描いてる絵があまりにも真剣というか、迫るものがあるというか」

「真剣？」

わたしは福島さんの言葉の意味がいまひとつ飲み込めなくて繰り返した。

「つまり、わたし、はじめてその先輩の描いた絵を観るまでどこか先輩のことをバカにしてたようなところがあったの」

と、福島さんは説明した。

「先輩って女の子に人気があったから、いつも女の子と一緒にいたし、だから、チャラチャラしたひとだっというイメージがあつて。だけど、そんなイメージのひとが描く絵があまりにも、情熱的というか、なんだろう、魂を込めて描いているなっていう感じがしたから、先輩のイメージがそこで大きく変わって」

「そっか」

と、わたしは相槌を打ってから、

「ちなみにどんな感じの絵を描いてたんですか？その先輩は」
と、興味を惹かれて尋ねてみた。

「そうね」

と、福島さんはわたしの問に頷くと、その先輩の描いた絵を思い出すように軽く眼差しを伏せた。

「どちらかというと、暗い感じの絵ね」

と、福島さんわずかな沈黙のあとで口を開くと言った。

「濃い青色の、青色というよりは黒に近い感じね、そんな色彩がメインにあって、何かが魂の奥の方で絡み合っているような、求め続けながら、永遠に得られないものを表現しているような・・・そんな感じの絵」

福島さんはそう言うのと、俯けていた眼差しをあげて、そこに何かがあることを確認するように正面の海に目を向けた。

わたしはそんな福島さんの横顔に視線を向けながら、福島さんのその好きなひとが描いたという絵を思い浮かべた。何故かそれはわたしのイメージのなかで、暗い夜の海面にひっそりと静かに咲く青色の花としてイメージされた。

少しの沈黙があって、その沈黙のなかにいくつもの波の音が吸い込まれていった。

「そのひとって、何か原因があってそういう感じの絵を描くようになったのかな」

わたしはふと思いついたことを口に出して言った。すると、福島さんはわたしの方を振り向いて、何か悲しい光景を目にするときのように軽く目を細めてわたしの顔を見つめた。

「わたしも、そこまで詳しいことは知らないけど、色々あったみたい」

福島さんはわたしの方に向けていた顔を正面に戻しながら静かな声で言った。

「先輩はお姉さんを事故で亡くしてるみたいなの。それでそのお姉さんが絵を描くのが好きだったひとみたいで・・・それで先輩も自然と絵に興味を持つようになったみたいだけど・・・だから、過去にお姉さんを亡くしていることが、もしかしたら先輩の絵に影響を与えてたのかもしれないと思う・・・もちろんそれだけじゃなくて、他にも色々あるんだと思うけど」

わたしは福島さんが好きだった、その先輩を想像してみた。

「でもね」

福島さんは続けて話した。

「先輩の絵は暗いんだけど、でも、すごく綺麗なの。黒って、不安や恐怖、そういうものをイメージさせる色彩なのに、でも、先輩の描いた絵を見てるとね、不思議と優しい気持ちにもなれるのよね」

わたしは福島さんの言葉に耳を傾けながら、またさつき自分が勝手にイメージした、夜の暗い海面に咲く青色の花を思い浮かべた。

「まず絵の表面に絵かがれているのは喪失感とか、哀しみとか、そういう感情で、その奥の方に、何か暖かいもの、たとえば鮮やかな緑の木々の葉にろ過されて地上に降る木漏れ日の光のようなものが隠されている気がしたかな、先輩の絵は」

そう言った福島さんの表情は、失ってしまったものを悼みながらも、それを優しく受け入れているような静けさがあった。

いつか沢田と話したこと

昼食を食べ終えると、またわたしは自分の車を運転して沢田の故郷を目指した。地図で見ると、沢田の実家はここから一時間以内の場所にあるはずだった。昔、沢田と話したときに、沢田は自分の故郷はいいところだと話していたが、なるほどな、と、わたしは思った。綺麗な海があつて、自然がたくさんある。

沢田はこの場所で一体どんな青春時代を過ごしたのだろう。きっと色んなことがあつたんだろうな、と、わたしは想像した。わたしがそうだったように。腹が立つことがあり、悔しいことがあり、嬉しいことがあり、哀しいことがあつたりしたのだろう。

そして考えているうちにわたしはふと思い出した。昔、沢田がわたしに話してくれたことを。あれは確かわたしが沢田に何が切っ掛けで小説を書くようになったのかと尋ねたときのことだ。確かわたしが沢田の家に遊びに行つて、そこで話しているうちに、どういふ会話の流れからか、そういう話になったのだ。

沢田は高校の頃まで本なんてほとんど読まない男だった。学校で

読書感想文を書かなければならないことでもない限り、まず活字ばかりの本なんて手に取ることはなかったね、と、沢田は何故か誇らしそうにわたしに話した。

じゃあ何が切っ掛けで本を読むようになったのか、と、わたしが尋ねると、彼は、実は自分は高校の頃、ちょっとした病気を入院していたことがあるのだ、と、わたしに教えてくれた。

「入院!？」

と、わたしがびつくりして言うと、

「いや、入院っていつでもそんな大層なものじゃないよ」

と、沢田は苦笑するように笑って言った。

「ちょっとした肝臓の病気。といっても、さっきも言ったように全然大した病気じゃなかったんだけどね。でも、手術やなんかやあつて、結局、一ヶ月くらい入院することになった」

「入院かー。わたしなんて身体だけは丈夫だからそういうのは一度もないな」

「なんだか羨ましいみたいない方をするね」

沢田はわたしの発言に可笑しそうに笑って言った。

「入院したことが一度もないなんて、それ、すごく恵まれてるんだよ」

わたしは笑ってそうだねと認めた。

「入院が決まったとき、正直、俺、すごく落ち込んだんだよ」と、沢田は話を続けた。

「俺、高校のときサッカー部に入ってたんだけど、その入院のせいで、大事な退会に出場できないことが決まっちゃったからさ」

「って、沢田レギュラーだったんだ。万年補欠みたいなイメージがあったけど」

わたしが笑って軽口を叩くと、沢田も笑って、

「あのさ、俺がいくら小説書いてるからって、運動オンチみたいな見方やめてくれる？」

と、迷惑そうに言った。

「それでも結構期待されてたんだから。沢田の黄金の左足って」

「はい、はい」

わたしは微笑して沢田の話を流した。

「それで」

と、沢田はやれやれというふうに軽く肩をすくめると、また話を続けた。

「その入院しているとき、同じ病室になった子がいたんだ」

と、沢田は言った。そう言った沢田の表情はそれまでと違って、どこことなく影を含んでいるように感じられた。

「同い年の女の子でさ。その子がすごく本を読むのが好きな娘だったんだ」

「それで？ ロンマスが生まれたりしたわけ？」

と、わたしが笑って茶化すと、

「そうだったら良かったんだけどね」

と、沢田はどこか哀しみを含んだような笑顔でわたしの顔を見ると、

「でも、残念ながら、そういう雰囲気にはならなかったよ」

と、沢田は苦笑して言った。

「まあ、比較的綺麗な娘だったし、だから、こんな娘と付き合えたらしいだろうくらいは思ってたけどね」

「そっか」

と、わたしは曖昧に微笑んで頷いた。

「ちょっとした片思い、だったのかな」

沢田は続けて冗談めかして言うとき軽く笑った。少し水気を帯びたような笑顔だった。

「目を覚ますと知らない病室にいたんだ」

と、沢田はひとつひとつ記憶を確認しながら話すようにゆっくりとした口調で言った。

「手術が終わったあとで、麻酔が切れはじめてるみたいで、腹のあたりがズキズキ痛んだ。でもそのときは意識が半分ぼんやりしてて、自分の身体に何が起こったのか、よく認識できなかったんだ。自分が手術を終えたばかりで、いま、病院に入院してるんだってことがよくわからなかった。回りの世界が妙に白っぽくて、だから、一瞬、自分が死んだのかなって思ったくらいだよ」

沢田はそう言うと、わたしの顔を見て、可笑しそうに口元を綻ばせた。

「で、だんだん状況が飲み込めてくると」

と、沢田は話し続けた。

「気になったのは、蝉の声だったな。季節は夏で、カーテンの開けられた窓から、朝の、透明な、でも、夏で、勢いのある光が一杯に

差し込んできてた。それから、となりを見てみると、自分の寝ているベッドのとなりに、ひとりの女の子がいたんだ」

わたしは沢田の言葉に耳を傾けながら、自分が手術を終えたばかりで、病院のベッドに寝かされているところを思い浮かべた。白い壁。白い天上。消毒液の匂い。窓から差し込んでくる、躊躇いのない光。耳障りな蝉の声。そしてとなりにいる女の子。

「彼女は俺と目が会うつと、おはようって言った。それで俺もよくわけもわからずおはようって返した。続けて彼女はあなたはなんの病気で訊いてきた。それで俺がまだよくまわらない頭で肝臓の病気だけどって答えると、彼女はふうんって頷いて、俺に興味を失ったみたいな感じでそれまで読んでた文庫本の続きに戻っていった・・・そのとき、綺麗な子だけど、なんか絡みづらい娘だなって思ったよ」

わたしはどう答えたらいいのかわからなかったので、曖昧に相槌を打った。

「で、それ以来、俺も何を話していいかわかんないから、ずっと黙ってた。でも、その部屋ってテレビもなんにもないし、だから、すごく退屈なんだよ。かといって、手術したりばかりで身体は動かせないし、眠ろうにも、眠れないし、そのうち看護婦さんが術後の経過を観に来て、またすぐ出て行って。そのうちにまた女の子が話しかけてきたんだ。なんか本貸そうか？って。退屈なんですよ。それでうんっていうと、彼女が貸してくれたのが小説だった。俺、さっきも話したと思うけど、それまで小説なんてあんまり読んだことなかったし、だから、漫画本じゃないのかって内心げんなりしたけど、でも、まあ、このまま退屈してるよりかはマシかって、その貸してくれた本を読みはじめたんだよ」

「そしたら、意外と面白かった？」

と、わたしは尋ねてみた。すると、沢田は微笑して頷いた。

「

ほんとに意外だったよ」

と、沢田は軽く笑って言った。

「小説ってこんなに面白いものなんだって思ったよ。病室っていう特殊な環境だから余計にそう感じたのかもしれないけど、集中して一気に読んだ」

「ちなみに、そのとき、その娘が貸してくれた本ってなんの本だったの？」

と、わたしは気になったので尋ねてみた。すると、沢田はちょっと困ったように眉根を寄せると、

「それがタイトルとか、作家の名前がよく思い出せないんだ。」
と、告げた。

「確か外国のひとが書いた結構古い小説だったと思うけど。十八世紀とか十九世紀くらいの・・・内容なら覚えてるんだけどね」

と、沢田は残念そうに続けて言った。

「どんな話？」

と、わたしは続けて尋ねてみた。すると、沢田はどう説明しようかと悩むようにうーんと唸って腕組みすると、

「一口で説明するのは難しいんだけど・・・なんだろう、哀しい話だったな」

と、言った。

「フランスかどこか外国の、田舎育ちの女の子が、都会に憧れて都会に出て、そこで自分なりの居場所を確立しようするんだけど、なかなか思うようにいかなくて、最後は失意のうちに死んでしまうっ

という話だったな・・・結末はすごく哀しいんだけど、でも、綺麗な小説だった。

最後の場面で雪が降ってるんだけど、そのなかで主人公の女の人が好きなのひとのことを回想している場面があつて、その描写がすごく印象に残ってるな。透明感があつて。雪の結晶が目の前できらめきながら冬の凍てついた大地に体積していくような気がした。夏なのに、自分がいま雪で覆われた世界にいるような気分になった」

わたしは沢田の話に耳を傾けながら、雪の降る、外国の夜の街を思い浮かべた。ひとりの女の人がアパートのベッドに寝ていて、窓の外に見える雪の夜を眺めている。

「そのひとはなんで死んじゃうの？」

わたしは沢田の話を聞いているうちに、その物語の主人公が報われないままに死んでしまうのが納得できないような気持ちになっていた。

「ずいぶん昔に一度読んだきりだから、細かい部分はあんまり覚えてないんだけど、確か病気だったよ」

と、沢田は言った。

「それもそんなに重い病気ってわけじゃなくて、風邪とかをこじらせてって感じだった。昔だから、風邪をこじらせたりするだけでも命とりだったんだろうね。彼女が病室で死にかけているとき、彼女の別れた恋人が、彼女に会うために彼女のもとに向かつてるんだけど、結局、彼女はそのひとに会えないままに死んでしまうんだ」

「哀しい話だね」

と、わたしは感想を述べた。沢田はわたしの話に黙って頷いた。

「それから」

と、沢田は気を取り直したよう話し続けた。

「入院しているあいだに彼女に貸してもらって色んな本を読んだよ。外国の小説から、日本の小説まで」

「それで文学に目覚めたわけだ？」

わたしが微笑してからかうように言うと、沢田は苦笑するような笑顔を見せて、

「まあ、そんなところかな」

と、頷いた。

「じゃあ、その娘に感謝しなくちゃね。だって、その娘が沢田を文学の世界に導いてくれたわけでしょ？」

「そう言われればそうかも」

沢田はわたしの発言に軽く笑って頷いた。

「で、その同じ病室に入院してた娘とはその後どうなったの？」

と、わたしは気になったので尋ねてみた。

「頑張って告白したりしたの？それとも沢田が退院してそれっきり？」

「・・・いや、それがさ」

と、沢田はわたしから表情を隠すように顔を俯けると、いくらかいいにくそうに言った。

福島さんの話 海の音

「先輩が自殺したのは、わたしが高二の秋だったの」と、福島さんは言った。

わたしは福島さんの言葉があまりにも唐突だったので、驚いて福島さんの横顔をじっと見つめた。そして、
「自殺？」

と、わたしは自分が何か聞き間違いをしてしまったのかもしれないと思つて小さな声で反芻した。

すると、福島さんはわたしの言葉に黙つて首を立てに動かした。

「・・・色々あったの」

わたしが福島さんの言葉にどう答えたらいいのか適当な言葉を見つけれずにいると、福島さんは説明するように続けて言った。

「わたし、先輩の絵を観てから、少しずつ先輩と色んな話をするようになったっていったの」

と、福島さんは心持顔を俯けながらゆっくりとした口調で言った。

「放課後、部活で一緒に絵を描いているときか、そのあと一緒に家に帰るときか。それでわたし先輩のこと、色々詳しく知るようになったんだけど」

「もしかして、福島さんは先輩と付き合うようになったんですか？」
わたしが気になって尋ねてみると、福島さんは振り向いてわたしの顔を見ると、

「残念ながら、ただ仲が良かっただけ」

と、少し哀しそうに微笑んで言った。

「その頃にはわたしは先輩のことが好きになってたんだけどね、でも、先輩には他に好きなひとがいたから」

「先輩には他に付き合ってるひとがいたんですか？」

と、わたしは気になって更に尋ねてみた。すると、福島さんは目で迷うように微笑んでから、

「先輩は女の子に人気があったら、好意を寄せてるひとはたくさんいたみたいだけど・・・でも、特定の付き合ってるひとはいなかったみたい」

と、答えた。

「というのも、先輩は先輩で片思いをしてたみたいなの」

と、福島さんはわたしの顔に向けていた視線を前に戻しながら言葉が続けた。

「そのひとはアトリエで知り合ったみたいで、三つくらい年上のひとだって言ってた。わたしは直接会ったことはないんだけど、そのひとが、亡くなったお姉さんに似てみたい」

福島さんは何か眩しい光景を目にするときのように心持目を細めるようにして語った。

「福島さんの先輩は確かお姉さんを亡くしてるんですよね？」

と、わたしはさっき福島さんから聞いたことを確認してみた。すると、福島さんは黙って頷いた。

「先輩が中学一年生のときに。交通事故で」

わたしの今見えている情景に重なるようにして、突然お姉さんを失って途方に暮れている少年のイメージが浮かびあがってきた。お姉さんの使っていた部屋と、お姉さんの描きかけの絵。

「もしかしたら」

と、福島さんはわたしのとなりで少し躊躇ってから口を開いた。わたしが彼女の方に視線を向けると、

「もしかしたら、先輩はそのひとがお姉さんに似てたから、そのひとのことが好きになったのかもしれないって思う」

福島さんは水色の色素を帯びたような声で言った。

少しの沈黙があつて、沈黙のなかに波の音が何かの隙間に迷い込むように響いていった。

「先輩のお姉さんは先輩に対して優しくかったみたいなの。年が離れてたせいか、いつも可愛がってくれてたって言ってた」

福島さんはわずかな沈黙のあとで口を開くと言った。

「これはあとになって・・・先輩が亡くなってから知ったことなんだけど、先輩のうちは両親の仲があんまりよくなくて、それでそんなとき、先輩の心のよりどころになってたのがお姉さんの存在みたいな。だから、先輩はお姉さんを事故で亡くしてからすごく精神的に不安定になってたんだと思う。支えを失って。わたしや、他のひとと接するときはいつも明るく振る舞ってて、そんな素振りは見せてなかったんだけどね」

わたしは福島さんの言葉に耳を傾けながら、自分の肉親を事故で亡くしてしまうということを想像してみた。いつも自分に優しくし

てくれた大切なひとを失うということを考えてみた。

「その先輩は」

と、何秒間の沈黙のあとで、わたしは福島さんの方を振り向くと言った。福島さんは不思議そうにわたしのことを見た。

「その好きな人に告白とかはしたりしなかったんですか？さつき福島さん、片思いをしてたって言ってたけど」

福島さんはわたしの問に、目元を微かに微笑みの形に変えたと、短く首を振った。

「何度か告白しようと思ったこともあるらしいんだけど、でも、結局できなかつたって言ってた。自分が子供にしか見られてないのがわかって、とてもできなかつたって。それに、そのひとにはもう既に特定の付き合ってるひとがいたみたいで」

「そっか」

と、わたしは頷きながら、少し、田畑のことを想った。

「でも」

と、福島さんは言葉を続けた。

「先輩にとってそのひとと付き合う、付き合わないはあんまり問題じゃなかったんじゃないかなって思う」

と、福島さんは哀しみを含んだ、でも、優しい目をして言った。

「先輩はたぶん純粋にそのひとに憧れてたんじゃないかなって思う。そのひとのことが好きだというよりも、先輩にとってそのひとはお姉さんの代わりのようなものだったのよ。たぶん。だから、先輩はただ側にいて、そのひとの存在を感じているだけで良かったんじゃないかな。そのひとの側にいると安心できたんだと思う。お姉さんが側にいるような気がして。もしかしたら、先輩自身はそんな自分

の気持ちには気がついてなかったのかもしれないけど」

福島さんはそこまで言葉を続けると、また前に向き直って、何か物思いに沈むように海に視線を向けた。わたしも黙って海を眺めた。そしてさっき福島さんが口にした言葉を頭のなかで反芻してみた。福島さんの好きだったひとがお姉さんに抱いていた想い。

ふと、目の前に、逆光のなかで撮った写真のように、白く霞んでそのお姉さんの姿が淡く浮かびあがって見えた気がした。雨に濡れた水色の花のような。

「昔、今日みたいに」

と、わたしがぼんやりとそんなことを考えていると、福島さんは言葉を続けて言った。

「先輩と一緒に写生にでかけたことがあるの。ふたりで。そのときも海を描きにいったんだけど」

わたしは振り向いて福島さんの横顔を見つめた。

「確か先輩が自殺しちゃう、一ヶ月くらい前のことだったと思う」と、福島さんは続けた。

「そのとき、先輩が海を見ながら、ときどき俺死んでもいいかなって思っているんだって言ったの。冗談めかして。生きてても楽しいことなんて何もないしって。わたし、そのとき、先輩が明るい口調で言ったから、あんまり気に留めてなかったんだけど、でも、今にして思うと、あのときあんなことを言ったのは、ほんきでそんなことを考えてたんだなって思う」

福島さんは微かに目を細めるようにして、どこか波打ち際あたりを見つめながら言った。海からの風に彼女の長く伸ばした髪の毛が

揺れていて、見ていると、まるでそれは空間のなかに福島さんという存在が淡く溶けだしていくみたいに思えた。

「その、先輩は」

と、わたしはちよつと躊躇つてから今まで気になっていたことを思い切つて尋ねてみた。

「何が原因で自殺しちゃったんですか？」

福島さんはわたしの言葉に、僅かなあいだ黙つたままでいた。それはわたしの問に答えることで、再び好きなひとを失ってしまうんじゃないかと恐れているようにも感じられた。耳元を吹きすぎていく風の音が奇妙に誇張されて聞こえた。

「進路とか、家庭の問題」

と、福島さんはやがて口を開くと、短く答えた。

「……遺書は見つからなかったから、確かなことはわからないんだけど、先輩、両親のこととか、進路のことで色々悩んでみたい」

福島さんは眼差しを伏せて、呟くような声で言った。

「さつきも話したと思うけど、先輩の両親はもともとあんまり関係が上手くいってなかったみたいで……それで先輩が自殺する少し前の月に、正式に離婚することが決まったみたいなの……そのせいで、先輩は大学に進学できなくなっちゃったらしくて……お金のこととか色々あつて……先輩はもつと絵の勉強をするために美大に行きたいって話してたから、そういうことが重なって、生きているのが嫌になっちゃったのかなって思う」

「……だけど、進路のことだったなら、お金のことだったなら、奨学金を取るとか色々方法もあつたんじゃないですか？」

わたしは先輩が簡単に自殺してしまったことが納得できなくて言

った。

すると、福島さんはわたしの科白に、それまで俯けていた顔をあげてわたしの顔を見ると、

「冷静に考えればそうね」

と、福島さんはわたしの単純な発想をやわらかく受け止めるように目元で弱く微笑んで言った。それは今にも形を失って消えてしまような感じのする透明感のある笑顔だった。

「でも、そのとき先輩はそんなふうになんか冷静に受け止めたり、考えたりすることができなくなってたのよ。たぶん」

と、福島さんはそう答えると、また前に向き直って、何か先輩の死について考え込むように、あるいは先輩と過ごした時間を辿るように、目の前に広がる濃い青色をした海にぼんやりと視線を彷徨わせた。

わたしは福島さんの言葉に何か答えようとして口を開きかけたけれど、でも、結局、自分の心のなかに生まれた感情を上手く言葉に置き換えることができなかった。わたしは諦めて開きかけていた口を閉ざすと、福島さんと同じように黙って海を眺めた。海の上では砕けて無数の細かい破片になった太陽の光がどこか遠慮がちに揺れていた。

「・・・先輩のお葬式はすごく寂しいお葬式だったな」

と、福島さんはいくらか長い沈黙のあとで口を開くと、そうポツリと言った。

「その日は冬で、すごく冷たい雨がしとしとと降ってて、みんなで火葬場に行って、そこからのぼる煙を見たの」

そう言った福島さんの瞳のなかにはそのときの情景が凍り付いて残っているかのような沈んだ、鈍い光があった。じっと福島さんの

瞳を見つめっていると、そのとき福島さんが目にしていたらう情景がそこから読み取れるような気がした。冷たい雨と、火葬場からのぼる煙と、灰色の厚い雲。

「・・・どうして」

福島さんは聞き取れないほどの微かな声で言った。

「どうして先輩はわたしに何も話してくれなかったんだろう」

福島さんは小さな声で言った。それはわたしに向かって話しかけているというよりも、自分の心のなかに浮かんた言葉をそのまま口にただけといった感じがあった。

「わたし、先輩と仲良かったのに。一杯色んなこと話したのに。絵のこととか、お姉さんのこととか、色々・・・。・・・なのに」

福島さんがそう言った直後に、まるで福島さんが口にした言葉を、海の冷たい青色の色素に染めていくように、波の音が静かに響いていた。

沢田の故郷にそして沢田のこと

自殺か、と、わたしは車を運転しながら心のなかで呟くように思った。あのとき、福島さんの話を聞いたとき、どうして先輩は自殺なんてしてしまったのだろう、と、何も自殺なんてしなくても良かったんじゃないかと単純に思ったものだけれど、でも、今にして思うと、自殺してしまった先輩の気持ちも少しは理解できるような気がした。

わたしもそんなにいつもというわけじゃないけれど、ときどき、もう死んでもいいかな、と、もう何も考えたくない、と、投げやりな気持ちになってしまふことがあった。この先生きていても良いことなんて何も無いんじゃないかと大袈裟に気持ちが沈みこんでしまふことがあった。

わたしはいま二十九歳で、無職だ。そしてそのうえ、恋人もいなければ、好きなひともない。ずっと好きで続けていた音楽も止めてしまった。もうかつてほど若くもないし、今、とくにやりたいことというものもない。

このさき自分は一体どうすればいいのだろう。そう思うと、途方に暮れてしまうことになった。からっぽだ、と、わたしは思った。いまの自分には何もない。そしてその空白のなかに暗闇の塊が生まれ

て、それがどんどん大きく膨張していくような感覚があった。

わたしは道路の片隅に車を止めると、車のドアを開けて、外に出た。

沢田からもらった手紙に書かれている住所が確かなら、今日の前に立っている二階建ての家が、沢田の実家のはずだった。

家の玄関の前まで歩いていき、恐る恐るインターホンを押す。でも、反応はなかった。もう一度インターホンを鳴らす。やはり、さつきと同じように反応はなかった。

きつと留守なのだろう。突然押しかけてきたのだから、こういう結果になっても文句は言えないのだが、でも、それにしてもな、とわたしは困った。これからどうしよう。家のひとが戻ってくるまでどこかで時間を潰すしかないだろうか。それとも沢田を驚かすことはできなくなってしまうが、いつそ沢田のケータイに電話をかけてみるか。

わたしがそんなことを考えていると、唐突に、目の前の引き戸式のドアが開いて、なかからひとりの若い女の人が顔を覗かせた。年のころはわたしよりも、ふたつか、三つくらい年下だったところだろうか。

「はい？」

と、彼女はドアを少しだけ開けてわたしの顔を見ると、怪訝そうに言った。わたしはまさか女の人が出てくるとは思っていなかったので多少動揺したけれど、

「あの、ここって沢田透さんのお宅でしょうか？」

と、確認してみた。

すると、

「そうですか」

彼女は少し警戒心を表情に滲ませながら頷いた。

わたしは彼女に事情を話して聞かせた。わたしが沢田の友人であること。沢田とは東京のアルバイト先で知り合って仲良くなったこと。今日は沢田を驚かせてようと思って、迷惑かとは思ったが、抜き打ちで訪ねてきたこと。

「そうだったんですね」

彼女はわたしの話を聞き終えると、どこかほっとしたように表情を緩ませた。それから、彼女は改めてわたしの顔に視線を向けると、

「あの、わたし、沢田の妹で、裕子っていいいます」

と、自己紹介してくれた。

「え、妹さんなんですか！？」

と、わたしはびっくりして言った。でも、言われて見ると、確かに、目元のあたりがどこことなく沢田を彷彿とさせた。

「似てませんか？友達にはよく同じ顔だねってからかわれるんですけどね」

と、彼女は苦笑するように笑って言った。わたしは彼女に続いて簡単に自己紹介した。

「大塚さんですよ？兄からちよくちよく話は聞いてます」
と、彼女はわたしの自己紹介に、明るい笑顔で言った。

「聞いてるって？」

と、わたしがちよつと驚いて訊き返すと、

「確かミュージシャンをやってるひとですよ？」

と、彼女はわたしの顔を尊敬するように見つめて言った。

「何か誤解があるようだから説明しておくけど、わたしの音楽はそんな大層なものじゃないし、それにもうやめちゃってるから」

と、わたしは苦笑して言った。

でも、それを彼女はわたしの謙遜だと受け取ったようで、

「めちやくちやギター上手なんですよ？」

と、言って、感激した様子でわたしの顔を見つめてくるので、わたしは恥ずかしいやら照れ臭いやらで困った。

「それで、沢田は今どうしてますか？」

と、わたしは尋ねてみた。

「もし、仕事中で今手が離せないようだったら、どこかで時間を潰してまたあとで来ますけど」

わたしの申し出に、裕子さんは困ったような苦しそうな強張った笑顔でわたしの顔を見た。それから、彼女は僅かに顔を俯けると、

「実はいま兄はいないんです」
と、言いにくそうに言った。

「いない？」

と、わたしが不思議に思つて尋ねてみると、彼女は黙つて頷いた。
「それはつまり、どこか旅行とかに出かけていて、当分のあいだは
戻つてこないってことですか？」

わたしの間に、裕子さんは口元で弱々しく微笑むと、首を振つた。

沢田の故郷、そしていつかした沢田の話

裕子さんの話を聞き終えたあと、わたしはすっかり言葉を失ってしまった。自分のなかに巨大な空白ができてしまったような感覚があった。

「・・・そんな冗談でしょ？」

と、いくらかの沈黙のあとでわたしはやっとそれだけ言った。

わたしの科白に、裕子さんはほんの少しだけ目元を微笑みの形に変えると、

「ほんとに冗談だったら良かったんですけどね」

と、寂しそうな声で言った。

裕子さんがわたしに話してくれたことによると、沢田は今から半年程前に事故に遭ってしまったということだった。そのとき、沢田は車でお客さんのもとに商品を配達に向かっていたらしいのだから、その途中でカーブを曲がりきれずに壁に正面から衝突してしまったという話だった。

幸い、どうにか一命は取り留めることはできたものの、強く頭をぶつけてしまったせいで、事故から半年が経とうとしている今でも沢田は意識不明の昏睡状態にあるということだった。

「でも、助かるんですよね？」

と、わたしは裕子さんの顔を見ると、すがるような気持ちで言った。裕子さんはわたしの間に、力なく首を左右に振った。

「今はまだなんとも言えない状態ですね」

と、裕子さんはわたしから表情を隠すように心持顔を俯けると、弱い声で言った。

「だけど、お医者さんの話だと、お兄ちゃんの意識が戻る可能性も全くないわけじゃないみたいです」

と、裕子さんはそれまで伏せていた顔をあげると、自分自身に言い聞かせるように言った。

「実際に、意識を失ってから五年とか六年が経ってから突然意識を取り戻すひともいるみたいだし」

わたしは彼女の言葉に耳を傾けながら、ここ半年程沢田から全く連絡がなかったのはそのためだったのかと変に納得していた。以前はそんなに頻繁ではないにしても、三ヶ月一度くらいの割合でメールが来ていたのに。

「もし良かったら」

と、わたしが黙って沢田のことを考えていると、裕子さんが遠慮がちに声で言った。

「わたし、これからお兄ちゃんの様子を見に病院に行こうと思ってるんですけど、一緒に行きますか？」

と、裕子さんは誘ってくれた。

わたしはぜひ一緒に連れて行ってくださいとお願いした。

「俺、退院してからも、その入院してた病院に通ったんだよ」と、沢田は話した。

「その病院で知り合った女の子に会うために。俺、入院してるあいだにその娘と結構仲良くなってるさ、だから、退院してからもその娘のことが気になっちゃって」

「ってことは、沢田の方が退院するのが早かったんだ」と、わたし感想を述べた。

「俺の病気はさっきも話したと思うけど、全然大した病気じゃなかったからね。だからあつという間に退院できたんだ」

「じゃあ逆に、女の子の方は結構重い病気だったの？」
わたしはふと気になって尋ねみた。

「彼女は心臓の病気だったんだ」

沢田はそれまでわたしの顔に向けていた眼差しを伏せて、少し小さな声で答えた。

「心臓の病気？」

と、わたしは沢田の言葉を反芻した。

沢田はわたしの言葉に黙って首を立てに動かした。

「難しい心臓の病気だった・・・心臓の弁がどうのこうのって・・・そのせいで、小さな頃からもう何度も入退院を繰り返してるって言うってた」

「・・・そうなんだ」

わたしはどんなふうに言ったらいいのかわからなくてただ頷いた。

少しの沈黙があつて、その沈黙のなかに、外の通りを走りすぎていく車の音や、近くの家で飼われているらしい犬の鳴き声が聞こえた。気がつくのと、いつの間にか日は傾き始めていて、部屋のなかには半透明の青味かがった闇が染みこみはじめていた。

沢田は部屋のなかに広がりはじめた闇が気になったのか、それまで座っていたソファアのうえから立ち上がると、歩いていって、部屋の電気をつけた。とたんに白熱当の温かみのある光がやわらかく広がっていって、夜の最初の闇はその光のなかに音もなく吸い込まれていった。沢田は電気をつけると、また歩いて戻ってきて、もとのようにソファアに腰かけた。

「・・・彼女が本をよく読むようになったのはその病気のせいだつて言ってた」

沢田はソファアのうえに腰を下ろすと言った。わたしはなんとなく明るく照らしだされた部屋のなかに向けていた視線を沢田の顔に戻した。

「心臓の病気のせいで外に出て遊んだり、激しい運動をしたりすることができなかったから、自然と本を手取るようになったんだって」

「そっか」

と、わたしは相槌を打ちながら、病室でひとり熱心に本を読んでいる少女の姿を想像した。長い黒髪の、顔立ちの整った女の子。気の強そうな、でも、活発で明るい瞳をした女の子。

「俺、その娘に触発されて本を読むようになってから、そのうちに何か自分でも物語が書いてみたいなって思うようになったんだ」

と、沢田はわたしの顔を見ると、少し照れ臭そうに微笑んて言った。

「それでそのことを彼女に話したら、彼女がいいじゃないって、面白そうって言うてくれてさ。俺、結構単純だからそれですぐその気になっちゃって、書き始めたんだよ」

「それで早速、彼女に自分の書いた物語を見せてみたの？」

と、わたしは微笑んでからかうように尋ねてみた。

すると、沢田は苦笑いして首を振った。

「ほんとに書いたらすぐに見せるつもりだったんだけど、なにしろ、それまで小説なんて書いたことがなかったら、全然思うようにいかなくてさ」

と、沢田は口元を綻ばせていいわけするように言った。

「自分で書いた小説をあとで読み返してみると、ひどいんだよ。書いてるあいだは興奮してるからそのことに気がつかないんだけど、一日おいて読み返してみると、もう臭すぎて全然駄目でさ。物語のイメージは頭のなかにあるんだけど、それを具体的な形にすることができなくて。だから、とても自分の書いた物語なんて見せられなかった」

「でも、彼女の方は納得しなかったでしょ？」

わたしは小さく笑って言った。

「彼女は沢田の書いた物語を早く読みたがったんじゃない？」

わたしの科白に、沢田は苦笑するような笑みを口元に覗かせて頷いた。

「彼女はべつにヘタクソでもいいから読ませてくれって言ったよ」

沢田は恥ずかしそうに微笑んで言った。

「彼女は自分の身近なひとが新しく作り出した物語に興味があるみたいだった。それに実際のところ、彼女は大抵の本を読みつくしちゃってて、何でもいいから読みたいと思ってたんだと思う」

と、沢田は口元に浮かべた笑顔をそのままに弁解するように言った。

わたしは沢田の言葉に耳を傾けながら、その娘はたぶん沢田のことが好きで、だから、沢田の書いた物語を読みたいと思ったんじゃないか思ったが、口に出しては何も言わなかった。

「それで結局、沢田はなんとか物語を書き上げることができたの？
なんとか彼女に小説をみせてあげることができたの？」

沢田はわたしの問に、ほんの少し表情を強張らせて曖昧な頷き方をした。沢田はそれとわからないほどの微かさで眼差しを落とした。

「・・・俺、彼女があんまり早く読まれてくってせかすものだから、まだ途中までしか書いてない物語を彼女にみせたんだよ」

と、沢田は言った。そう言った沢田の顔にはまだ笑顔に似たものが浮かんでいたが、それはまるで花が萎れていくように徐々にその形を失いつつあった。

「そしたらどうだった？」

わたしの間に、沢田はいくらかきこちなく口角をあげた。

「喜んでくれたよ」

と、沢田は言った。

「素人がはじめて書いたにしてはよく書けてるんじゃないって言ってくれた。もしかしたらお世辞だったのかもしれないけど」

沢田はそう言うってから微苦笑した。

「でも、それですっかり俺得意になっちゃって、また続きができたらしめるよって彼女に約束したんだ。なんとか来月くらいまでは完成させてもってくるからって。でも」

と、沢田はそこで言葉を区切った。

「でも？」

わたしは続きが気になって沢田の言葉を繰り返した。沢田はわたしの間に、何秒間のあいだ黙っていた。それはわたしの間に答えることを躊躇っているようにも見えたし、何かについて思いを巡らせているようにも思えた。

「でも、続きがどうしても上手く書けなかったんだ」

と、沢田はいくらかの沈黙のあとで口を開くと言った。

「何度やり直しても、途中で止まっちゃうんだ。だから、一ヶ月たっても物語を完成させることができてなくて」

言いながら同時に状況を思い出しているのか、沢田の顔には何か焦燥感にも似た表情が浮かんでいた。

「俺、その頃、二週間に一回くらいの割合でその娘が入院している病院に通ってたんだけど、あまりにも物語が進まないものだから、彼女に言ったんだよ。ごめんって。次お見舞いに来るときまでに小

説を書き上げることはできなさそうだって。なんとか頑張ってみるけど、難しいかもしれないって」

「・・・そう」

と、わたしはどう言ったらいいのかわからなくて、沢田の顔を見つめて相槌を打った。

「そしたら、彼女、ちょっとだけ寂しそうに微笑んで、それなら仕方ないねって言うてくれたんだ。焦らないでいいから、いい物語を書いてねって。その彼女の言葉を聞いて、俺すごく申し訳なくなっちゃってさ。ああ、彼女は俺の書く物語を楽しみに待っていてくれたんだなって思ってた」

わたしは沢田の話に耳を傾けながら、ずっと幼い頃の思い出を思い起こしていた。父親に遊園地に連れて行ってもらえるはずだったのに、急遽父親の仕事の都合でいけなくなってしまったときのこと。

「・・・それで？ 沢田はやっぱ次に会うときにまでに物語を書き上げることはできなかったの？」

沢田はわたしの問に、思いつめた表情で弱く頷いた。

「・・・だから、辛かったよ」

と、沢田は言った。

「その次に彼女に会にいったとき。彼女はただ微笑んだだけで特に何も言わなかったけど、やっぱり彼女が残念そうにしてるのがわかったからね」

わたしは沢田の報告を受けて、落胆を隠そうとして無理に微笑んでいる女の子の姿を想像した。

「だから、そのとき俺、彼女に約束したんだ。次までには、次までには、必ず物語を書き上げて持つてくるからって。そしたら彼女は微笑んでうんって言った。今度会うときを楽しみにしてるって」

沢田はそこまで話すと、いくらか話し疲れたように黙った。わたしも黙っていた。ふと窓の方に視線を向けると、カーテンの隙間から夜の闇に黒く塗りつぶされた世界が覗いて見えた。沢田はわたしの方に視線を向けると、わたしの手元に置いてあるマグカップが空になっていることに気がついたようで、新しくお茶をいれようかと尋ねてきた。わたしは曖昧に微笑んで大丈夫だと答えた。

沢田はわたしの返事に頷くと、俺は自分の分を入れてくるよとどこか疲れた笑顔で言って、それまで座っていたソファから立ち上がると、台所の方へと歩いていった。わたしはなんとなく立ち上がって歩いていく沢田の後ろ姿を目で追った。

しばらくして沢田はインスタントコーヒーをいれて戻ってくると、さっき同じようにソファの上に腰を下ろした。そして黙ってコーヒーを一口啜った。沈黙のなかに外の通りを走りすぎていく車の音が静けさを引き立てるように響いた。

「それで？そのあとどうなったの？」

と、わたしは沢田が戻ってくると、続きが気になったので恐る恐る尋ねてみた。すると、沢田は視線をあげてわたしの顔を静かに見つめた。それから、沢田はまたすぐに眼差しを伏せると、黙ってコーヒーカップを傾けた。沢田は話しの続きを話そうかどうか迷っているように見えた。

「・・・俺、そのとき、知らなかったんだけど・・・」

と、沢田はいくらかの沈黙のあとで、口を開くと言った。

「彼女はその週に手術の予定を控えてみたいなんだ」

と、沢田は言った。

「手術？」

と、わたしは沢田の言葉を小さな声で反芻した。沢田はわたしの科白に黙って頷いた。

「俺も、これはあとになって彼女のお母さんから聞いて知ったことなんだけど」

と、沢田は言いにくそうに言葉を続けた。

「あ、俺、彼女のお見舞いに行っているうちに、彼女のお母さんともだいぶ仲良くなったんだけど」

沢田はわたしの顔をちらりと見ると、付け足すように言った。

わたしはうんと相槌だけを打った。

「・・・それで、彼女の心臓の病気は俺が思っていたよりもずっと進
行してたみたいなんだ」

と、沢田は小さな声で話し続けた。

「彼女は俺と話するとき、全然そんなこと話してくれなかったから知らなかったんだけど、ほんとに、彼女の心臓はほんとに危険な状態になってたみたいなんだ。このまま放置しておくと、すぐ死に直結するような。だから、そんな状態をどうにかするために、彼女は今まで一番難しい手術を受けることになってたみたいで」

「それで？」

と、わたしは言った。

「手術は成功したの？」

沢田はわたしの間に、視線をあげてちらりとわたしの顔を見ると、またすぐに逃げるように視線をもとに戻した。

「手術自体はなんとか」

沢田は歯切れの悪い答えを返した。

「でも、術後の経過があまりよくなかったらしくて」

と、沢田は言葉を続けた。

「手術のあと、一度意識をとりもどした彼女はまたすぐ意識を失って、そのまま昏睡状態になっちゃったみたいなんだ」

わたしは沢田の話に何かコメントしようとしたけれど、上手く言葉がでてこなかった。

「

・・・俺、その次の週も物語を書き上げることができなくて、でも、彼女に悪いから途中までもいいからみせようって思ってた彼女に会いに行ったんだけど、そしたら、彼女はテレビとか映画でしか観たことがないような呼吸器をつけて眠ってたんだ・・・俺、そのときはじめて、彼女の手術のこと、お母さんから聞いて知ったんだけど・・・それで、俺、彼女に話しかけたんだ。まだ小説、途中までしかできないけど読んでよって。面白いかわからないけど、せつかく書いたからさって。でも、もちろん、彼女は何も答えてくれなくてさ」

沢田はそこまで話すと、話すべき言葉を見失ってしまったように黙った。黙って、足元のフローリングの床あたりをじっと見つめていた。

「それで、彼女はどうなったの？」

わたしは結末を聞くのが怖いような気もしたけれど、思い切って尋ねてみた。

「もちろん、なんとか助かったんでしょ？」

沢田はわたしの間にいくらかのあいだ黙っていた。黙って、当時のことを回想しているようだった。そして沈黙のあとで沢田は俯いていた顔をゆっくりと上げてわたしの顔を見ると、力無く首を振った。

「彼女はそのまま息をひきとったよ」

と、沢田は言った。深い哀しみの色素を帯びたような弱い声だった。たとえば、冬の冷たい風が空き地の枯れ草をそつと揺らしていくような。

「俺、その次の週も、彼女に会いにいくつもりでいたんだけど、でも、彼女に会いにいった日の翌日に、彼女のお母さんから電話があつて、いつも娘に良くしてくれてありがとつて言われて、娘は今息をひきとったからつて言われたんだ」

沢田はそう言うつと、まるで哀しみを自分の内側に閉じ込めようとするように瞼を閉じた。そして何秒間のあいだそのままであつた。沢田は閉じていた瞼をゆっくりと開いた。しばらくの沈黙があつた。それはまるで沢田の友人の死そのもののように、わたしと沢田のあいだでゆっくりと重みをもって広がつていった。

「俺、自分のせいで、彼女は死なせてしまったような気がしたよ」
いくらか長い沈黙のあとで、沢田は口を開くと言った。

「もし、あのとき、俺がなんとか物語を書き上げていることができれば、そしてその物語を彼女に見せることができていれば、もしかしたら、彼女は死なずにすんだのかもしれないつて、彼女は助かったのかもしれないつて、そんな気がするんだ」

わたしはそんな沢田の科白に耳を傾けながら、死んでしまった沢田の友人のことを考えていた。彼女は手術を受ける直前一体どんな気持ちでいたのだろうかと思った。きつと不安だったろうし、怖かったに違いないと思った。そしてそんな彼女にとって唯一の楽しみだったのは、もしかしたら、沢田の書く物語だったのかもしれないな、と、わたしは感じた。たぶん、彼女は手術を受ける前に沢田の物語が読みたいと思っていたはずだ。そして彼女は……。

「でも、だからそのぶん、余計に、沢田は頑張っている物語を書かなくちゃいけないんじゃない？」

と、わたしは少し迷ってから言った。すると、沢田は顔をあげてわたしの顔をいくらか戸惑ったように見つめると、それから、
「そうだね」

と、少し哀しそうに静かに目元で微笑んで頷いた。

裕子さんの話

「今はもう音楽活動はしてらっしゃらないんですか？」

わたしが窓の外を流れていく景色に視線を彷徨わせながら、いつかした、沢田との会話を思い起していると、裕子さんが氣を使って話しかけてきてくれた。

わたしはぼんやりとしていたので慌ててとなりを振り返ると、運転席でハンドルを握っている裕子さんの横顔に視線を向けた。そして、

「ええ、もうだいぶ前に」

と、曖昧に微笑して答えた。

沢田が入院している病院までは裕子さんの車で一緒に行くことになった。わたしが運転してきた車は近くにある、無料で止められる駐車場（というか空き地）を裕子さんに教えてもらって、そこに停めてきた。

「もったいないですね。わたし、一度、大塚さんの曲、聞いてみたかったかなあ」

と、裕子さんは明るい口調で言ってから軽く笑った。

「わたしの曲なんて全然大したことないから駄目ですよ」

と、わたしは苦笑して答えた。

「たぶん、がっかりするだけです」

「そんなことないと思いますけど」

裕子さんは微笑して言った。それから、「でも、なんで音楽辞めちゃったんですか？」

と、裕子さんはちらりとわたしの方を振り向くと、本当に不思議に思っているような口調で尋ねてきた。

「お兄ちゃん、大塚さんのこと、めちゃくちゃ才能あるひとだって言ってたけど」

「沢田、そんなこと言ってたんですか？」

と、わたしは小さく笑って言った。自分でも顔が赤くなるのがわかった。

「わたしなんて全然ですよ」

わたしは口元に浮かべた笑みをそのままに続けた。

「音楽でプロになりたいと思ってるやつなんてそれこそ吐いて捨てるほどこいて、結局のところ、わたしもそのうちのひとりでしかなかったんです」

「そんなことないんじゃないですか？」

裕子さんは横目でわたしのことを見ると、小さく笑って言った。「だってお兄ちゃんは大塚さんのこと褒めてたし」

わたしは裕子さんの科白に曖昧に微笑むと首を振った。

「それに実際問題、ずっと一緒に音楽をやってきたやつが途中でぬけちゃって、だから、具体的に音楽を続けていくのが難しくなっちゃったんです」

それから、わたしは彼女に田畑のことを話してきかせた。音楽の専門学校で彼と知り合い、ずっと一緒に音楽活動が続けてきたことでも、その彼が三年ほど前に事情があつて故郷に帰っていつてしまったこと。それからわたしはひとりで音楽活動が続けていこうとしたのだが、結局上手いかなかったこと。

「なんか駄目なんですよ、わたし」

と、わたしは軽く笑って弁解するように言った。

「あいつじゃないと。他のひとと一緒にやってみたりもしたんだけど、なんかしつくりなくて。それで音楽に対する情熱みたいなものが薄れちゃって。そのあと、バイトしてた喫茶店にそのまま就職して最近まで働いてたって感じです」

「・・・そっか。色々あったんですね」

と、裕子さんはどこか気遣わしげに軽く目を細めてわたしの顔を見ると、それから前に向き直った。そして、

「でも、そういうふうにそのひとじゃないとだめだって思えるような絆っていいですね」

と、静かな口調でしみじみとそう思っているように言った。

「絆って、そんな大層なものじゃないけど」

わたしは軽く笑って答えた。それから、

「裕子さんは今何をされてるんですか？お仕事は？」

と、ふと気になって尋ねてみた。

「わたしですか？」

と、裕子さんはわたしの言葉を繰り返すと、

「わたしはいま、調律師をやってます。ピアノ調律師」

と、明るい表情で言った。

「何か、お仕事、愛されてるみたいですね」

と、わたしは微笑んで感想を述べた。それから、わたしは小学校のときの友達のことを少し、思い出した。彼女は今頃どうしているのだろうと思った。

「愛してるかどうかはわからないけど、嫌いじゃないですね」

と、裕子さんはわたしの感想に、照れ臭そうに小さく笑って答えた。

「仕事で色んな家の色んなピアノを触るんですけど、その家その家でそれぞれピアノに個性というか、歴史みたいなものがあって、何か色々考えさせられますね」

「ひとえにピアノといっても、それぞれ違いがあるっていうことですか？」

と、わたしは尋ねてみた。すると、裕子さんはちらりとわたしの顔に視線を走らせると、またすぐに前に向き直りながら、

「そうですね。ピアノっていつでもほんとに色々ありますね。単純に、高価なピアノとそうでないピアノの違いっていうことじゃなくて・・・まあ、もちろんそれもあるんですけど、でも、わたしが言いたいのはそういうことじゃなくて、なんというか、ピアノの個性？みたいなもの？」

裕子さんはそこまで言葉を続けてから急に照れ臭くなったのか弁解するように微笑すると、

「とにかく、ピアノひとつひとつに違いがある気がするんです。人間にそれぞれ違う性格があるみたいに」

と、裕子さんは微笑んで穏やかな口調で言った。

「そういうものなんですかね」

と、わたしは感心して頷いた。

車はいつ間にか市内を抜けて海岸線の道を走りはじめていた。裕子さんの話では沢田が入院している総合病院は海が見下ろせる見晴らしの良い場所に建っているということだった。道のずっと先の方に小高い丘のような場所があり、そこに比較的大きな建物が建って

いて、あれが沢田の入院している病院だろうかとわたしが考えていると、

「最近、ピアノの調律をやっていて、すごく印象に残ってることがあるんです」

と、裕子さんがふと思いついたように話はじめた。わたしは窓の外に向けていた視線を裕子さんの横顔に戻した。

「その家はじめて担当したんですけど、結構年配の男のひとが依頼してきてくれて」

裕子さんはそこまで話すと、ちらりとわたしの顔に視線を向けて、「ごめんなさい。こんな話退屈ですよね」

と、苦笑して謝った。

わたしは微笑んでそんなことないですよと答えると、ぜひ続きを聞かせてくださいとお願いした。すると、裕子さんはいくらか戸惑ったようにわたしの顔を見て、それから、視線をフロントガラスの向こうに戻すと、ゆっくりとした口調で話しはじめた。

「その日は日曜日で、朝から雨が降ってました。すごく静かに降る雨。外の世界はそのまま雨の色素を取り込んだような半透明青色の色彩に染まってる」

わたしは裕子さんの話しに黙って耳を傾けながら、雨の降る、静かな日曜日の朝を思い浮かべてみた。そうしていると、聞こえるはずのない穏やかな雨音が、どこらともなく聞こえてくるような気がする。

した。

「わたし、だいたい一日平均五、六件の家を回るんですけど、その日の最初の仕事が、そのおじいさんの家だったんです。はじめて担当することになったひとの家。それでわたしはじめての家だからすごく緊張してたんですけど、わたしが家を訪ねていくと、そのおじいさんはすごくにやかに話しかけてくださって、ああ、わたし、いいひとで良かったなって思ったんです。家によっては・・・言い方悪いけど、すごく気難しい方もいらっしやるから」

「調律師の方も色々大変なんですね」

と、わたし微笑して言った。

「そうですね。場合によってはすごく気を使って大変なときもありますね」

と、裕子さんは答えてから、苦笑するように口元を綻ばせた。

「それで早速、ピアノの調律をさせてもらうために、自宅に上がらせてもらってピアノをみせてもらったんです。そしたら、そのピアノがすごく綺麗なピアノなんですよ。綺麗というか、ずっと大切に使われてきたんだらうなっていう感じがするピアノなんです。黒のアップライトピアノ」

わたしはなんとなく小学校の頃、学校の教室で、佐藤さんがピアノを弾いている姿を思い浮かべた。

「わたし、じゃあ調律をはじめてさせてもらいますねっておじいさんに言いました。おじいさんはにこにこしてどうぞよろしくお願いしますって言うてくれて。わしはピアノのことはよくわからんから、適当にやっってくださいって」

裕子さんはそこまで話すと、言葉を区切った。わたしは黙って彼女の言葉の続きを待っていた。

「そしたら」

と、彼女は五秒間程黙っていてから口を開いた。

「全然音が狂ってないんですよ。ちゃんと音が合ってるんです。これだったら調律の必要なんてないくらい。ただ」

と、裕子さんは言った。

「ただ？」

と、わたしは裕子さんの言葉を繰り返した。

「すごく透き通った、まるで外の冷たい雨に濡れたみたいな哀しげな音が出るんです。わたしの思い込みかもしれないんですけど」

わたしは裕子さんの言ったピアノの音を思い浮かべてみた。どことなく淡い青色の色素がついたようなピアノの音色。

「それでわたし言ったんです。おじいさんに」

と、裕子さんは話し続けた。

「何か寂しい感じの音が出るピアノですねって。何かすごく大きなものを失って、ピアノ自体がその喪失感をずっと抱えてるみたいな感じがするって。そしたら、おじいさん、何か思うところがあったのか、眼差しを伏せて、やっぱりそうですねるか沈んだ表情で答えたんです」

「ということは、裕子さんのそのコメントが、まさに確信をついてたってことなんですかね」

裕子さんはわたしの感想に、短く顎をたてに引いた。

「そしたら、おじいさんがわたし教えてくれたんです。このピアノは十年くらい前に亡くなった奥さんが大切してたピアノだって。結婚してすぐくらいの頃に購入して、奥さんはピアノを弾くことがすごく好きなひとで、毎日ように弾いてたつて。奥さんが亡くなつてからも奥さんが大切してたピアノを駄目にしたくなくて、頻繁にピアノの調律に来てもらつてるけど、やっぱり昔と今ではピアノの音の響き方に違いがある気がするつて。もしかたら、ピアノの音の響き方が変わつてしまつたのは、そのせいだろうか。つまり」

「つまり、ピアノの自体が奥さんの死を悼んでいて、それでピアノの音に変化がでているんじゃないかってこと？」

わたしが裕子さんの科白を引き継ぐと、裕子さんはそうだというようにこくりと頷いた。

わたしは誰もいない部屋の片隅で、いなくなつてしまつたひとの帰りを待ちわびている黒のアップライトピアノを思い浮かべた。

「そのひとの奥さんは何が原因で亡くなつたんですか？」
と、わたしは氣になつたので尋ねてみた。

「風邪をこじらせて肺炎にかかつて亡くなつたつて言つてました」と、裕子さんはわたしの問に少し小さな声で答えた。
「もともと身体が弱いひとだつたつて」

「・・・そつか」

わたしは適当な感想が思いつかなくてただ頷いた。

「わたし、ピアノの調律が終つたあと」

と、裕子さんは更に言葉を續けて言つた。

「おじいさんに提案してみたんです。おじいさんも試しにピアノを弾いてみませんか？そのとき、ほとんど調律の必要ななんてなかったから予定してた時間よりもずっと早く終わったんですけれど、だから、この空いた時間を利用しておじいさんにピアノを教えてみたらどうだろうって急に思いついて」

裕子さんは言うてから少し悪戯っぽく微笑んだ。

「そしたらどうでした？」

と、わたしは裕子さんの笑顔につられるようにして微笑んで尋ねてみた。すると、裕子さんは可笑しがっている表情で、

「最初は照れ臭がって、いや、わたしはいいよなんておっしゃってたんですけど、何度かわたしが勧めてるうちに、もともと奥さんがピアノを弾いているのを見ていて興味はお持ちだったみたいで、じゃあ、ちよつとだけやってみようかなって言うてくださって」

「へー」

と、わたしも楽しくなってきた。小さく笑った。わたしの今見えている情景に重なるようにして、ひとりのおじいさんがいくらかぎこちなくピアノと向かいあっている場面が浮かびあがってきた。

「何の曲を教えたんですか？」

と、わたしは尋ねてみた。

すると、裕子さんはわたしの顔を見て、

「エリーゼのためにです」

と、楽しそうな口調で答えた。

「エリーゼのためにって、初心者がやるには難しいんじゃないですか？」

と、わたしが驚いて言うと、裕子さんは小さく笑って、

「もちろん、全部ちゃんと終えたわけじゃなくて、主題のところを、

右手でちょこつとだけです。それくらいだった初心者の方でも大丈夫じゃないですか？」

「ああ、なるほど」

わたしは納得して頷いた。

「でも、なんでエリーゼのためなんですか？」

と、わたしは不思議に思って尋ねてみた。すると、裕子さんはほんの少し哀しみを含んだ優しい表情で、

「わたしが、そのおじいさんに、奥さんが弾いてた曲で何か印象に残ってる曲ってありますかって尋ねたら、おじいさんが名前は覚えてないんだけど、こんな曲って口ずさんでくださったんです。それでその曲がエリーゼのためにだったんです」

わたしはおじいさんの右手によって紡ぎ出される、いくらたどたどしくはあるけれども、優しく清らかに響くピアノの音を思い浮かべてみた。その淡い水色の色素を帯びたようなピアノの音は、外に降る透明な雨音とやわらかく溶け合っていく。

「そしたら不思議なんですけど」

と、裕子さんは言葉を続けた。

「おじいさんがピアノを弾いた瞬間、それまでどちらかというと冷たく透き通るような感じだったピアノの音色がほんの少し明るく輝いた感じがしたんです。なんとというか、音に温もりが灯ったっていうか・・・まあ、それこそ、単純にわたしの思い込みかもしれないんですけどね」

裕子さんはそう言って自嘲気味に少し笑うと、

「でも、ほんとに、そんな気がしたんです」

と、微笑んで続けた。

「じゃあ、もしかしたら」

と、わたしは微笑んで言った。

「そのピアノは嬉しかったのかもしれないね」

と、わたしは言った。

「そのおじいさんに弾いてもらえて。しかも、その曲が亡くなった奥さんがいつも弾いてた曲だったから、まるで亡くなった奥さんがそこにいるような気持ちになったのかも」

裕子さんはわたしの科白に何も言わずにただ目元で微笑んで静かに頷いた。

ふと、窓の外に視線を向けてみると、そこには花が咲いていた。誰かが植えたのだろう、道に沿ってずっと花が咲いていた。何ていう名前の花なのかはわからなかったが、それは微かに青色の色素を含んだ白い花だった。その道に沿って植えられた名前の知らない花は、夏の終わりの静かな風に吹かれて少し寂しそうに揺れていた。耳を澄ませていると、風に吹かれて揺れる花の音が聞こえてきそうな気がした。

沢田の想い、裕子さんが話してくれたこと

「お兄ちゃん」

と、裕子さんは少し大きな声で静かに眠っている沢田に声をかけた。

沢田の病室は十畳程の広さを持った四人部屋だった。沢田のベッドは窓際にあつて、窓から外を覗いてみると、そこからはさつき裕子さんと一緒に通つてきた海岸線の道を見下ろすことができた。海は気持ち良さそうな濃いブルーをしている。時刻はもう午後の四時を回り、日の光は微かに紅の色素を帯びつつあった。

「お兄ちゃん」

と、裕子さんはベッドに横になっている沢田にもう一度声をかけた。

「大塚さんが来てくれてるで」

と、裕子さんは話しかけた。でも、相変わらず沢田は裕子さんの声に無反応だった。ただ静かに目を閉じている。

「こうして見てると、ほんとにぐっすり眠ってるだけみたいに見えますね」

わたしはなんとコメントしたらいいのかわからなくて、とりあえず思ったことを口に出して言った。

裕子さんは沢田の顔に向けていた視線をあげてわたしの顔を見る

と、ちよつと困つたように小さく微笑んだ。それから、裕子さんは再び沢田の顔に視線を向けると、

「せっかく大塚さんが来てくれてはるんやから、ちよつとくらい目を覚ましなさいよ」

と、冗談めかして言った。

「沢田、久しぶり」

と、わたしも裕子さんに続いて少し小さな声で沢田に声をかけてみた。でも、やはり反応はなかった。

「やっぱり、あきませんね」

と、裕子さんはわたしの顔を見ると、寂しそうに小さく口元を綻ばせて言った。

わたしはどう答えたらいいのかわからなくて、曖昧に口元を笑みの形に変えた。そしてわたしはもう一度穏やかな顔で眠り続ける沢田の顔に視線を落とした。沢田はいまこうしているあいだ、何を考えているのだろうかと思った。ほんとうに意識がないのだろうか。それとも意識はあるのだけれど、ただ単に身体を動かすことができないのだろうか。わたしは今から三年くらい前に最後に沢田に会ったときのことを思い出した。そのとき、沢田と話したことを思い出した。

わたしたちはベッドの側に置いあるスチール製の椅子に腰を下ろした。

沈黙があつて、その沈黙なかに外の廊下を忙しそうに行き来する看護婦さんの足音や、わたしたちと同じように患者のお見舞いに来ているひとたちの話し声が聞こえた。それから、残された最後の力を振り絞るようにして鳴く蝉の声。

「・・・わたし、ちょっと気になってることがあるんですよ」

裕子さんはしばらくの沈黙のあとで口を開くとポツリと言った。
わたしが裕子さんの顔に視線を向けてみると、裕子さんは沢田の顔をどこか哀しそうな表情で見つめていた。

「あのとき、お兄ちゃんが事故に遭ったときのことなんですけど」と、裕子さんはゆっくりとした口調で言った。

「・・・あとがなかったんです」

と、裕子さんは呟くような声で言った。

「あとがなかった？」

わたしは裕子さんの科白を繰り返した。裕子さんはちらりとわたしの顔を見ると、それからまた沢田の顔に眼差しを落としながら、

「ブレーキをかけたあとがなかったんです」

と、裕子さんはどこか思いつめた口調で言った。

「わたし、あとでお兄ちゃんの事故現場を見にいったんですけど、そしたら、普通はできるはずのブレーキをかけたあとがなくて・・・だから、もしかしたら・・・そんなことあるはずないと思うんですけど、でも、もしかしたら、お兄ちゃんは自殺しようとしてたんじゃないかって・・・」

「まさか」

と、わたしは裕子さんの科白を小さく笑って打ち消した。わたしの知っている限り、沢田が自殺を考えるなんて到底思えなかった。

「もちろん、わたしもそう思うんですけどね」

と、裕子さんはわたしの顔を見ると、取り繕うように微笑して言った。

「でも、ちょっと気になることがあって・・・」

と、裕子さんは再び眼差しを伏せながら小さな声で言った。

裕子さんが話してくれたことをまとめるとだいたいこういうことになった。

沢田は実家に帰ってから東京にいた頃と同じように小説を書き続けた。でも、沢田のお父さんはそんな沢田のことを快く思っていなかった。そもそも沢田のお父さんは沢田が大学を卒業したあとすぐに就職しなかったことが不満だった。

せっかく高い学費を払って大学まで行かせてやったというのに、フリーターをして五年近い歳月を無駄にしてしまったと感じていた。それでやっとどうか実家に連れ戻して家業を継がせることにしたというのに、いまだに小説を書き続けているなんて何事かというのが沢田のお父さんの意見だった。

沢田のお父さんは沢田に対して、いい加減くだらない小説を書くことなんてやめて仕事に専念しろと説教し、それに対して沢田は好きにさせてくれと反論して、口論が耐えなかったと裕子さんはわたしに説明した。

「・・・まあ、お父さんの言いたいこともわからなくはないですけどね」

と、わたしは裕子さんの顔を見ると、小さく微笑して感想を述べた。

「やっぱり、大塚さんも、音楽をやった頃、両親と将来のことでもめました？」

裕子さんは気遣わしげな表情でわたしの顔を見ると言った。わたしは裕子さんの科白に苦笑すると弱く首を振った。

「うちの両親はいい加減なひとたちだから。わたしがどこでなにをやったようと、基本的に他人に迷惑さえかけなければ、なんかどうでもいいって感じで」

裕子さんはわたしの笑みに誘われるようにして口元を綻ばせると、
「うちの両親もそんな感じだったら、お兄ちゃんももうちょっと気楽だったんだろうなあ」

と、言ってから、ため息をつくように少し小さく笑った。

「たぶんお父さんは、沢田の将来のことが心配だったんでしょね」
裕子さんはわたしのコメントに、寂しそうな表情で静かに頷いた。

またいくらかの沈黙があつて、その沈黙のなかから音があふれ出すように周囲の物音が聞こえてきた。子供が何かを叫ぶ声、それをたしなめる、母親らしい女性の声、病院のアナウンス。誰かが咳をする音。台車が動いていく音。

「あの日の少し前、お兄ちゃんとお父さん、いつにもまして大喧嘩でした」

沈黙のあとで、裕子さんは話しはじめた。

わたしは裕子さんの顔に黙って視線を向けた。

「その日、お父さんが、お兄ちゃんの小説の原稿をお兄ちゃんが仕事に行っているあいだに勝手に捨てちゃったんです。・・・あいつ

はまだこんなくならないものを書いているのかって言って。

それであとから家に帰ってきたお兄ちゃんがそのことに気がついて、ものすごく怒って、お兄ちゃん、お父さんのこと殴ったんです。それまでは何を言われてもそんなことしたことがなかったんですけど、でも、そのときはよっぽど頭にきてたのか・・それでお父さんも感情的になって、なぐりあいみたいな感じになって」

「そのあとどうなったんですか？」

と、わたしは結末が気になって尋ねてみた。すると、裕子さんは伏せていた眼差しをあげてわたしの顔を見ると、またすぐに視線を落としながら、

「どうにも」

と、弱い声で答えて短く首を振った。

「それからふたりは口をきかなくなりました。お互いに無視し合ってる感じで。お兄ちゃんはずっと怒ってるみたいで、むすっとした表情で、わたしが話しかけてもまともに答えてくれなくなっちゃいました・・それでその少しあとに、あんなことになっちゃったから、もしかしたらって、わたし気がかりなんですよね」

と、裕子さんは顔を俯けたまま心細そうな声で言った。

わたしは裕子さんの科白に何か答えようとしたけれど、上手く言葉が出てこなかった。

「・・・お父さんの気持ちもわかるけど、でも、お父さんもお兄ちゃんのこともうちょっと考えてあげれば良いのに」

裕子さんはわたしが黙っていると、独り言を言うように小さな声で言った。

またしばらくの沈黙があった。わたしも黙っていたし、裕子さんも何かついて思いを巡らせているように黙っていた。気がつく、部屋のなかの空間は、水で溶いて薄めたように淡い黄色の色彩に染まっていた。傾きはじめて日の光が何かの沈殿物のように病室に薄く広がっていた。手を伸ばすと、その空間のなかに広がった淡い黄色の光に触れることができるような気がしたけれど、もちろんそれはそんな気がするだけだった。

「・・・わたし、お兄ちゃんと食事に行っただけです」

と、裕子さんはいくらか沈黙のあとで、それまで俯けていた顔をあげてわたしの顔を見ると言った。

「お兄ちゃんが事故に遭う、一ヶ月くらい前」

窓から差し込む日の光が裕子さんの顔を弱く照らしていた。さっきよりもいくぶん濃度を深めた日の光に照られた裕子さんの顔は力なく影って見えた。

「久しぶりにふたりで食事に行こうってわたしがお兄ちゃんのこと誘っただけです。このところお兄ちゃん、元気がない感じがしてたから」わたしは答えようがなかったのだからただ頷いた。

「それで近くのレストランに行っただけで色々話したんです」と、裕子さんは続けた。

「日常のなんでもないことから、わたしの恋人のこととか、友達のこととか、色々・・・それで話していくうちに、将来の話になったんです。これからのこと」

わたしは裕子さんの話しの続きを黙って待っていた。

「そのとき、お兄ちゃん、すごく悩んでるみたいだな感じでした」

と、裕子さんは眼差しを伏せて言った。

「他の友達とかはみんな社会に出てどんどん大人になって自立していつているのに、自分だけがずっと同じ場所に留まってる感じがするって。自分には大した才能もないことはわかってるけど、でも、諦めることもできなくて、ときどき、自分がどうしたいのかわからなくなるって話してました・・・どうすることがベストなのか・・・」

沢田が裕子さんに打ち明けた悩みは、かつてわたしも持ったことのある悩みだった。自分だけが同じ場所をぐるぐる回り続けているような疲労感。迷い。惨めな気持ち。わたしはかつて自分という存在が不安定に揺れていた時期を思い出した。

「わたしも、そういうことは何回も考えましたね」

と、わたしは裕子さんの話しに弱く微笑んで感想を述べた。

「そういうことは何回も考えました」

「・・・そういうとき、大塚さんはどうしたんですか？どうやってその悩みを乗り越えたんですか？」

裕子さんは顔をあげてわたしの顔を見ると真剣な表情で言った。

わたしは自嘲気味に口元を綻ばせると、弱く首を振った。

「どうもしてません」

と、わたしは小さな声で答えた。

「田畑がいたときは・・・相方がいたときはまだなんとかそんな自分の弱い気持ちを抑えることができてたんですけど、でも、田畑がいなくなっただけからは、駄目でしたね」

と、わたしは苦笑いして答えた。

「他のみんなは社会人になってちゃんとやってるのに、自分だけがいつもまでも叶わない夢にしがみついているように思えて、情けなくなってきたって」

「・・・そっか」

と、裕子さんはわたしの科白に曖昧に頷くと、なんて感想を述べたらしいのかわからなかったのか、下を向いて黙った。

短い沈黙があった。

「そのとき、裕子さんはなんて言っただんですか？」

わたしは裕子さんの顔を見つめて尋ねてみた。

「裕子さんは沢田の話になんてアドバイスしたんですか？」

わたしの問に、裕子さんは顔をあげてわたしの顔を見た。わたしの顔を見たときに裕子さんの瞳が自信なさそうに微かに揺れたような気がした。

「ゆつくりやればいいんじゃないってわたしは言いました」

と、裕子さんは答えた。

「べつに小説を書くのは何歳になってからでもできるんだし、自分のペースでやっていけばいいんじゃないって。べつに才能なんてなくたって、自分が書きたいと思ってるんだったら書けばいいんじゃないって。お父さんの言ってることとかは気にしなくてもいいと思うって」

「そしたら、沢田はなんて言っていました？」

裕子さんはわたしの問に、軽く顔を伏せて弱く首を振った。

「そしたら、お兄ちゃんはわたしの言葉にありがとって答えてました。・・・だけど、何かまだ考え込んでいる様子でしたね」

「・・・そっか」

わたしは裕子さんの言葉に何か答えようとしたけれど、適切な言葉が見当たらなくて曖昧に相槌を打った。

また沈黙が訪れて、その沈黙のなかに周囲の物音がゆっくりと膨らんで行くように聞こえた。誰かがドアを開けて出て外に行く音。空調の音。いつの間にかさつきまで聞こえていた蝉の鳴き声は聞こえなくなっていた。どこか空の高いところを飛んでいく飛行機のエンジン音が微かに聞こえた。

「きつと大丈夫ですよ」

と、わたしは顔を俯けている裕子さんに向かって改まった口調で言った。わたしとしてはできるだけ裕子さんを元氣付けてあげたかった。

「わたしの知る限り、沢田は自殺なんてするようなやつじゃないです」

裕子さんは顔を上げると、そう言ったわたしの顔を少し不思議そうに見つめた。

「きつと沢田はちょっと運が悪かっただけです。絶対そのうちに目を覚まします。だから、安心してください」

わたしは微笑みかけて言った。

裕子さんはそう言ったわたしの言葉に、少しあいだ黙っていたけれど、やがてその口元を小さく笑みの形に変えると、
「そうですね」

と、少し哀しみ含んだ透明な声で頷いた。

あのととき沢田が言ってくれたこと

相変わらず沢田は瞳を閉じたまま身動きひとつしなかった。

病室のなかに差し込む日の光は少しずつオレンジ色の色素を深めていき、沈黙のなかでオレンジ色の色素に染まった空間を見つめていると、まるでそこに流れていく時間が、川の、穏やかな水の流れのように目に見えてくる気がした。

裕子さんは五分ほど前にケータイに電話がかかってきて、ちょっと話してくると言って病室を出て行ったきりまだもどらなかった。

「沢田」

と、わたしはなんとなく小さな声で眠り続けている沢田に話かけしてみた。

「あんたは今何を考えてんだよ」

と、わたしは独り言を言った。

「せつかくわたしがはるばる遠いところを訪ねてきたっていうのにさあ」

わたしは最後、沢田が引越していく前に告げたことを思い出した。

あのととき、沢田は言ったのだ。言ってくれたのだ。好きだ、と。ずっと好きだったのだ、と、わたしに言ってくれたのだ。

引越し作業を終えて、ふたりで夕飯を食べに行つて、それで沢田

に家まで送ってもらう帰り道の途中でのことだった。

通りに沿って植えられた満開の桜の花が綺麗にライトアップされていて、その薄紅色の花には、ほんの微かに、何か哀しいように青紫色の夜の色素が溶け込んでいた。

「お別れする前にさ、どうしても話しておきたいことがあるんだ」と、沢田は急に歩みを止めると、改まった口調で言った。わたしがどうしたのだろうと思って沢田の顔を見つめると、沢田はわたしの視線を避けるように顔を俯けて、しばらくのあいだ黙った。

「なんだよ。急に改まって」
わたしは沢田が黙ったままでなかなか話出そうとしないので、困って小さく笑って言った。

「そんな改まって言わなきゃならないことなわけ？」
わたしはからかうように微笑して言った。すると、沢田は何かを決心したようにそれまで俯けていた顔をあげてわたしの顔を見つめると、

「あの、実はさ」
と、言いづらそうに口を開いた。

そして、沢田はわたしに言ってくれたのだ。わたしのことが好きだ、と。ずっと前から好きだったのだ、と。

「なんだよ。それ」
わたしは恥ずかしくなって、それを誤魔化そうとして小さく笑って言った。

「そんな真顔で冗談なんか言っなよ」

わたしの科白に対して、沢田は冗談なんかじゃない、と、告げた。本気で言ってるんだ、と、沢田は真剣な表情で言った。

わたしは黙って沢田の顔を見つめた。あまりにも突然な言葉に、何も言葉が出てこなかった。冷たく澄んだ、でも、春の匂いを含んで微かに甘いような香のする弱い風が、耳元を吹きぬけて行つた。わたしは何枚かの花びらが、ライトアップされて微かに青味がかつた夜の闇に溶けるように散っていくのを目で追つた。

「ごめん」

と、わたしはいくらか長い沈黙のあとで口を開くと、やっとそれだけ言つた。沢田の気持ちは嬉しいけど、でも、わたしにはいま他に好きなひとがいて、だから、申し分けないけれど、沢田の気持ちに応えることはできないのだ、と、わたしは告げた。

わたしの答えに、沢田は口元で力なく微笑んだ。

「うん、わかつてたよ。それは」

沢田は少しのあいだ黙ってそれから、口を開くと、少し傷ついたような、でも優しい笑顔で言った。わかつていたけど、ただ最後に自分の気持ちを伝えておきたかったのだ、と、沢田は続けてから、弁解するように言つて口元で弱く笑つた。

「俺が今言つたことは忘れてよ」

と、沢田はなんでもなさそうに明るい声で言った。
「ただのひとり言みたいなものだから」

うん、と、わたしは沢田の科白に曖昧に微笑んで頷いた。何て言えればいいのか、どう言うべきなのか、あまりこういうことを経験したことの無いわたしにはよくわからなかった。

「それじゃあね」

と、沢田は言った。

「実家に帰って、しばらくして落ち着いたら、また手紙でも出すよ」
沢田は微笑んでそう言った。そして、沢田は軽く手をあげると、わたしに背を向けて、もと来た道をゆっくりと引き返していった。
わたしはしばらくのあいだ、そんな沢田の背中をほんやりと見つめていた。

涙が頬を伝っていったのはそのときだった。泣くつもりはなんてなかったのに、涙は勝手に溢れて出て、眠っている沢田の顔を濡らした。

わたしは慌てて溢れて出した涙を手の中で拭いた。わけもわからず、何かが無償に哀しかった。今まで自分が信じてきたものが、大切にしてきたものが、簡単に踏みにじられてしまったような、激しい苛立ちのようなものを感じた。

わたしは誰かに対して叫び出したいような衝動に駆られた。なんでだ、と。なんでこんなふうになってしまったんだ、と、わたしは思った。わたしたちは自分なりに必死に前に進もうとしてきたはずなのに、どうして、どうして、どこにも辿り着けずに終わってしまうんだ、と、虚しくて、悔しかった。

「あんたは小説を書くんじゃないのかよ」

と、わたしは沢田の顔を見つめながら心のなかで呟いた。

「ひとに希望を与えられるような小説を書くんじゃないのかよ」
と、わたしは瞳を閉じて、そのなかに見える心の暗闇のなかで、強く叫んだ。

でも、もちろん返事なんてなかった。

閉じていた瞳を再び開くと、窓から差し込む深いオレンジの色の光が、哀しくも暖かく眠り続ける沢田の顔をそっと照らしていた。

散り行く桜の花のようにそっと

裕子さんとは再び沢田の家の前で別れた。病院を出たあと、裕子さんの車で沢田の家まで送ってもらい、そこで別れたのだ。

わたしは乗ってきた自分の車を運転しながら、裕子さんと帰りの車のなかで話したことを考えた。

病院からの帰り道、ふと話題にのぼったのは、沢田の書いた小説のことだった。裕子さんは実はまだ自分は兄の小説を読んだことがないのだ、と、わたしに告げた。そして、裕子さんはわたしに兄の小説を読んだことはあるか？と尋ねてきた。

わたしは彼女の問に、あると答えた。東京に居た頃は恥ずかしがつて、なかなか読ませてくれなかったのだが、一年くらい前に手紙が届いて、その手紙のなかに、沢田が書いた小説が同封されていたのだ、と、わたしは裕子さんに説明した。

「どうでした？読んでみて？」

裕子さんはわたしの方を振り向くと、強く興味を惹かれた様子で尋ねてきた。

「良かったですよ」

と、わたしは小さく微笑んで答えた。

「お世辞とかじゃなくてほんとに」

わたしの答えに、裕子さんは安心したような嬉しそうなやわらかな笑みを目元に浮かべてわたしの顔を見た。

「結末は必ずしも、ハッピーエンドとはいえないのかもしれないけど、でも、優しくて、暖かくて、静かで・・・わたしは好きでしたね。ほんとうは今日、その読んだ小説の感想を伝えようと思ってたんですけどね」

裕子さんはわたしの科白に少し悲しそうに目元で微笑んでただ頷いた。

裕子さんは別れ際、またきてください、と、言った。

「大塚さんが来てくれると、お兄ちゃんも喜ぶだろうし、わたしもまた大塚さんに会いたいから」

裕子さんはにっこりと微笑んで言った。

わたしは裕子さんの科白にまた来ますと答えた。

車の窓を開けると、風が吹き込んできた。風は冷たく澄んでいて気持ち良かった。風のなかには海の匂いが混ざっていた。そしてほんの微かに秋の香も。窓の外にはずっと海岸線の景色が広がっている。夕暮れの光がたっぷりと溶け込んだ海は、オレンジの果汁で一杯に満たされたような暖かな色彩に染まっていた。

口に含まると、甘酸っぱい味がしそうな色。空は半透明のやわらかなピンク色に染まっていて、空のずっと高い所からは夜の最初の透き通った闇が静かに沈み込もうとしていた。

わたしは窓の外に見える海と空があまりにも綺麗だったので、道端の隅に車を寄せると、車を停車させた。そして窓の外に見える景色をぼんやりと眺めた。そうしながら、わたしは昨日から今日にかけてのことを振り返った。

ほんの短いあいだのことなのに、ずいぶん色んなことがあったよ
うな気がした。七年近く暮らしたアパートを引き払い、車に乗って
兵庫県までやってきた。そしてその途中で佐藤可奈という女の子と
出会い、過去の色んな大切なひとたちのことを思い出した。それか
ら、裕子さんと、沢田のこと……。

わたしは車のシートに深くもたれかかると、軽く瞳を閉じた。そ
うしていると、色んな細々とした疲れが一気に押し寄せてきた。軽
い眠気を感じた。

そしてわたしはふと思った。このまま眠るように自分という存在
が消えてしまふとしたら、どんなに楽だろうな、と。風のなかにわ
たしという存在は溶けてなくなってしまうのだ。何かを考えるのが
億劫に感じられた。生きていくことの困難さを思うと、そこから逃
げ出したいという衝動に駆られた。何かもかもがどうで良
い気持ちになった。

どうせどこにも辿り着けないのだ、と、妙に悲観的な気分になっ
た。思考のなかに、一ヶ月ほど前した部長との会話が蘇ってきた。
部長は会社を辞めようとしているわたしに対して不満そうに言った。
そんなことをしていると、また同じようなことを繰り返すことにな
るぞ、と。きみは甘えているんだ、部長は言った。

そう、わたしは甘えた、弱い人間なのだ、とわたしは思った。わたしにはいくところなんてどこにもないのだ。これまでやってきたことが全て無駄だったように、沢田があんなことになってしまったように、全ては無駄だし、どこにも辿り着けないのだ、と、感じた。

わたしは閉じていた瞳を開くと、足元のアクセルをじっと見つめた。そうしようと思えば、と、わたし思った。今、ここで思いっ切りアクセルを踏み込めば、車はガードレールを突き破って、わたしの身体は車ごと遙か崖下の海に落ちていくのだろう。・・・そうすれば楽になれる。そうだ。そうしよう。

わたしは一瞬本気でそう考えて、慌てて我に返った。一体何を考えているのだろう。バカらしい。そもそもわたしには死ぬ勇氣なんてないじゃないかと呆れた。

わたしは足元に落としていた視線を上げると、もう一度夕暮れの優しい光に染まった海を眺めた。確かあのとき観た絵も、海の絵だったな、と、わたしは何となく思い出した。

わたしが福島さんの絵を観たのは、今から二年ほど前のことだった。福島さんとは彼女が留学していつて以来疎遠になっていたのだが、二年くらい前に街でばったり再会したのだ。

わたしたちは近くの喫茶店に入って軽く話をした。そのとき、福島さんは今自分は留学を終えて日本に戻ってきていて、アトリエで絵を教えながら絵を描き続けている、と話してくれた。そしてそのとき、彼女が今度個展を開くのでぜひ観に来てくれと言って、観に

いったのだ。

彼女はその個展を友人と一緒に開いていた。個展会場には彼女の絵がいくつか展示されていたのだが、なかでも印象深くに残ったのは、海を描いた絵だった。夕暮れの海辺を描いた絵。

夕暮れの海辺にはひとりの女性が描きこまれている。絵はその女性を横から捉えて描いていた。女性は海辺でしゃがみこむと、淡いピンク色の色彩に染まった海水を掌で掬っている。掌のなかには透明な海の水が溜まっていて、その掌のなかに溜まった海水を見つめる女性の眼差しはどこか哀しげに見えた。まるでそこに失われたものを見つめているかのような儚い光があった。

でも、その瞳のなかに宿っているのは、ただ哀しみだけではなくて、ちょうど夕暮れの光のそのように、深く暖かな何かも含まれている気がした。眼差しを伏せた彼女は深い喪失感を抱えながらも同時に、決心をしているようにも思えた。やがて希望へと変化していく静かな光のようもの。

わたしは窓の外に広がっていく景色を見つめながら、そのとき観た絵のことを思い出した。そしてまた久しぶりに福島さんに会いたいな、と、彼女のことを懐かしく想った。

夕暮れの光に染まった、夏の終わりの空を、一機の飛行機が横切っていた。静けさのなかに、遠くを飛んでいく飛行機のエンジン音が静けさを強調するように聞こえた。

わたしは空のずっと高いところを飛んでいく飛行機を見つめながら、沢田に語りかけるように思った。また来るよ、と。今度来たと

きには、意識を取り戻してすっかり元気になったあんたに会えるといいね、と。

わたしは車のエンジンをかけると、走り出した。沈黙が気になってカーテスレオのスイッチを入れると、流れはじめたのは、優しく透き通った静かなピアノの曲だった。いつかどこかで聞いたことがあるような。

もしかしたら、小学校の頃の同級生だった佐藤さんが演奏しているのかもしれないな、と、わたしはなんとなく想像した。

沢田が書いた小説は、ひとりの女性を描いた物語だった。

物語の主人公は三十代前半で、彼女は離婚していて、小さな幼い娘をひとりつれている。ある日の休日、桜の花が見ごろを迎えた温かな日、彼女は幼い娘を連れて散歩も兼ねて近くの公園に花見に出かける。そしてそこで彼女は風に吹かれて時折散っていく薄紅色の花を見つめながら、過去の色んなことを思い出す。

離婚してしまった夫のこと。昔の夢……。彼女の昔の夢はプロのミュージシャンになることだった。でも、その夢はついに叶うことはなく、以前は毎日のように弾いていたギターも最近はめっきり触れることもなくなってしまった。

彼女は思う。全ては失われていくんだな、と。わたしのこれまでの人生はなんだっただろう、と。好きなひと、夢も、全て失ってしまった。彼女はつい惨めな気持ちになって、泣き出しそうになってしまう。

でも、そのとき、彼女の耳元に届いたのは、娘の歌声だった。さつきテレビで流れていた歌謡曲を娘が口ずさんでいるのだ。彼女はそんな娘の姿を見つめて微笑む。そして思う。そうだ。また今度久しぶりにギターを弾いてみようかな、と。娘のためにギターを演奏しやるのだ。それまであまりに目にしたことのない母親の姿を目にして、目を丸くする娘の姿が目に見え、彼女が可笑しかった。

そしてもしかしたら、娘も歌を歌うことが好きな娘になってくれるかもしれないな、と、彼女は思う。薄紅色の花がいくつも舞い、それは目の前に広がる空間を輝くような桃色の色彩に染めていく。

わたしは沢田の小説に触発されるように思った。家に帰ったら、久しぶりにギターを手に取ってみようかな、と。べつにプロになるとかそういうことではなく、ただ自分のためだけに歌を歌ってみるのも悪くないかもしれない。そしていつか沢田が目を見ましたら、そのときは、沢田が自分の小説を見せてくれたように、わたしもヘタクソな歌を彼に聞かせてあげようと思った。

一日の終わりの静かな光が、全てのものを、まるで記憶のなかの情景のような色彩に染め上げていた。ほんの少しだけ物悲しく、でも、やわらかで懐かしい色彩に。散りゆく桜の花のようにそっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5273k/>

散りゆく桜の花のようにそっと

2010年12月6日23時18分発行